大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年二月一日發行 第一卷第五號

近代思想

二月號

道德の創造（感想）……榮（一）
奴隷根性論（評論）……大杉榮（二）
石川三四郎に送る（感想）……榮（五）
ワイルドの社會觀（評論）……山本飼山（六）
本當に恐れぬ男（對話）……伊庭孝（一〇）
ホワイト・テロル（小品）……寒村（一四）
共和祭（小說）……大杉榮（一六）
改宗（小說）……荒畑寒村（二〇）
人と超人（脚本）……堺利彥（二五）
一月の小說（批評）……寒（三六）
大久保より（雜錄）……寒（三八）
消息……記者（四〇）
新刊紹介……記者

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP
95
J2
K47
no.5
213-442254

實業之世界

大正二年二月一日發行
每月二回一日十五日發行
定價一冊郵稅共十二錢　半年分一圓卅八錢　一年分二圓六十四錢

二月一日號

▼自然の齟齬　幸田露伴
▼地價論……安部磯雄
▼大建築物の完全を試す機械發明の豫言……ウヰリヤム、アレン
▼身を立て道を行ふの說……黑岩周六
▼地獄探險……中村とき子
實業出身の政治家……三宅雪嶺
▼姑息なる限外發行の稅增率……社說
▼ガントレット式速記術……森上生
▼米籾輸入稅は撤廢す可からず……堀越善重郎
▼煉炭栽培は理論に非ず……杉浦重剛
新農商務大臣中小路廉君……數名士談

發行所　東京芝露月町　實業之世界社　振替貯金口座三三四三

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第一巻　第五號

道德の創造

社會の或る少數者の間に、其の道德觀念が全く變つて了ふ時代がある。

誠に危險なる時代である。

曾ては最も道德的であるとせられてゐた事が、こんどは反對に、最も不道德的な事であるとせられて來る。從來尊敬せられ神聖視せられてゐた慣習だの、傳習だの、又は或る一階級の利益の爲めにのみ造られた道德だのが、一切放擲せられて了ふ。そして所謂不道德的な行爲をする事を以て、自らに對する及び世間に對する、最高の義務であると認めるやうな人が出て來る。

誠に危險なる人物である。

けれども史家の教ふる所に據れば、此の危險なる時代に於て此の危險なる人物によつて、歷史は常に向上の一轉化をするのだと云ふ。

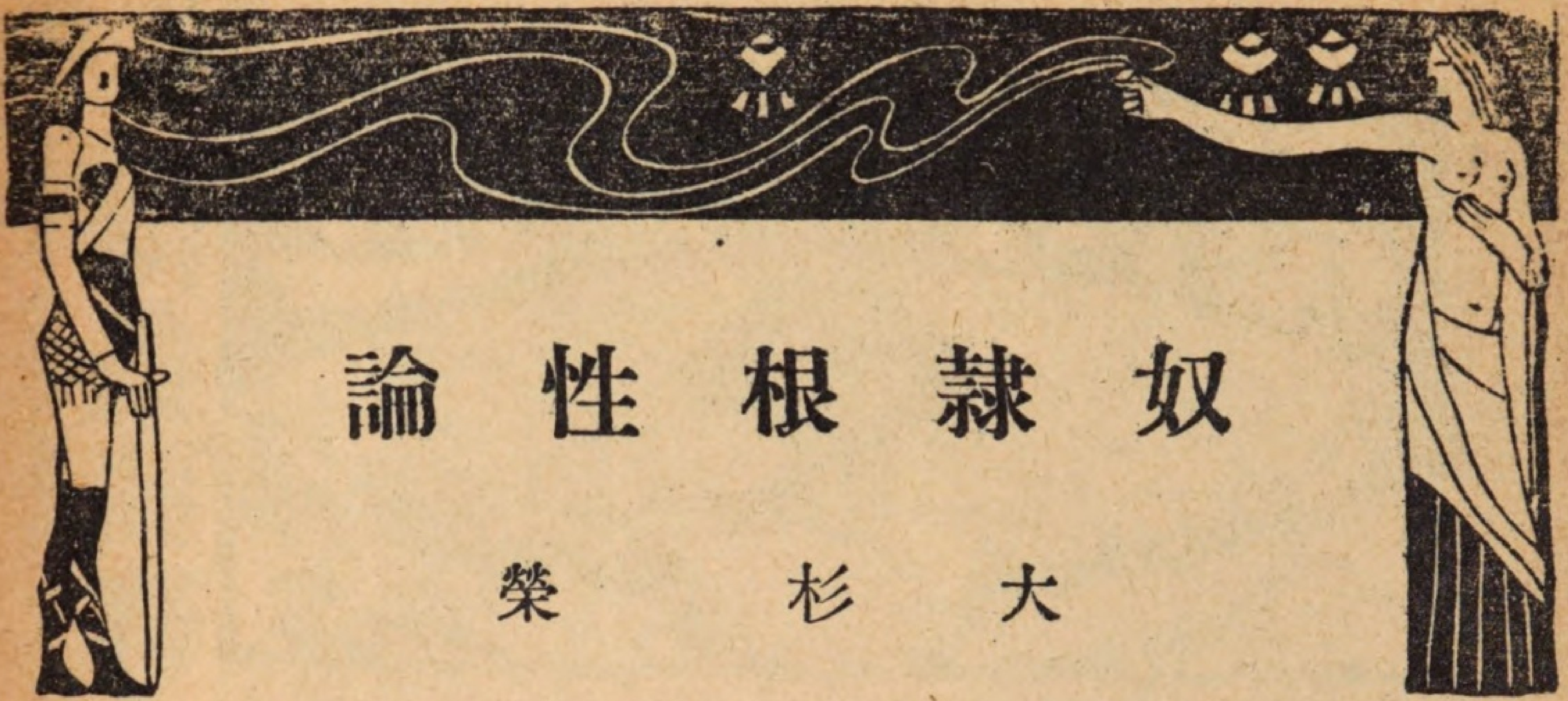
道德を創造するんだ。

幸に此の種の時代に生れて、此の種の人物の一人に數へられる。

誠に千載の一遇である。

——榮——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



奴隷根性論

大杉榮

一

斬り殺されるか、燒き殺されるか、或は又食ひ殺されるか、何れにしても必ず其の身を失ふ可き筈の捕虜が、生命だけは助けられて苦役に就かせられる。一言にして云へば、これが原始時代に於ける奴隷の起源の最も重要なるものである。

嘗つては敵を捕へれば直ぐ樣其の肉を食らつた赤色人種も、後には暫くこれを生かして置いて、部落中寄つてたかつて、てんでに小さな炬火を以て火炙にしたり、或は手足の指を一本々々切り放つたり、或は灼熱した鐵の棒を以て燒き焦したり、或は小刀を以て切り刻んだりして、其の殘忍な復讐の快樂を貪つた。

けれどもやがて農業の發達は、まだ多少食人の風の殘つてゐた、蠻人の此の快樂を奪つて了つた。そして捕虜は駄獸として農業の苦役に使はれた。

又等しく此の農業の發達と共に、土地私有の制度が起つた。そして此の事も亦、奴隷の起源の一大理由として數へられる。現にカフィールの部落に於ては、貧乏と云ふ言葉と奴隷と云ふ言葉とが、同意味に用ひられてゐる。借金を返へす事の出來ない貧乏人は、金持の奴隷となつて、毎年の土地の分配にも與らない。そして犬と一緒になつて主人の意のまゝに働いてゐる。

斯くして從來無政府共產の原始自由部落の中に、主人と奴隷とが出來た。上下の階級が出來た。そして各個人の屬する社會的地位によつて、其の道德を異にするの事が始まつた。

二

勝利者が敗北者の上に有する權利は絕對無限である。主人は奴隷に對して生殺與奪の權を持つてゐる。しかし奴隷には、あらゆる義務こそあれ、何等の權利のあらう筈がない。

奴隷は常に駄獸や家畜と同じやうに取扱はれる。仕事の出來る間は食はしても置くが、病氣か不具にでもなれば、容赦もなく棄てゝ顧みない。少しでも主人の氣に觸れれば、直ぐ樣殺されて了ふ。金の代りに交易される。祭壇の前の犧牲となる。時としては又、酋長が客膳を飾る、皿の中の肉となる。

けれども彼等奴隷は、此の殘酷な主人の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

行ひをも敢て無理とは思はず、只自分はさう取扱はる可き運命のものとばかりあきらめてゐる。そして社會がもつと違つた風に組織されるものであるなどゝは、主人も奴隷も更に考へない。

奴隷の此の絶對的服從は、彼等をして所謂奴隷根性の卑劣に陷らしむると共に、又一般の道德の上にも甚しき頽敗を來さしめた。一體人が道德的に完成せられるのは、これを消極的に云へば、他人を害するやうなそして自分を墮落さすやうな行爲を、殆んど本能的に避ける德性を得る事に在る。然るに何等の非難又は刑罰の恐れもなく、且つ何等の保護も抵抗もない者の上に、容赦なく其の出來心の一切を滿足さすと云ふが如きは、これと全く反對の效果を生ずるのは云ふまでもない。飽く事を知らない暴慢と殘虐とが蔓る。

斯くして社會の中間にあるものは、弱者を虐遇する事に馴れると同時に、又强者に對しては自ら奴隷の役目を演ずる事に馴れた。小主人は自らの奴隷の前に傲慢なると共に、大主人の前には自ら全く奴隷の態度を學んだ。

强者に對する盲目の絶對の服從、これが奴隷制度の生んだ一大道德律である。そして主人及び酋長に對する此の奴隷根性が、其の後の道德進化の上に、如何なる影響を及ぼしたかは次ぎに見たい。

三

先きにも云つた如く、奴隷は馱獸である家畜である。そして奴隷は先づ、家畜の中の犬を眞似た。

カフィール族は其の酋長に會ふたびに、『私はあなた樣の犬でございます』と挨拶をすると云ふ。しかし自分の身を犬に較べる此の風習は、啻に言葉の上ばかりでなく其の身振や處作に於ても、人間としての躰の形の許せるだけ犬の眞似をすると云ふ事が、殆んど例外もない程に到る處の野蠻人の間に行はれてゐる。

先づ其の一般の方法としては、著物の幾分かを脱いで、地に伏して、そして土埃を被るに在る。

亞弗利加は奴隷制度の最も嚴格な處であつた。從つて此の犬の眞似の儀式も、殆んど極端なまでに行はれてゐる。

アルゲン島附近のアザナギス族は、酋長の前に出ると、裸になつて、頸を地につけて、頭と肩とに砂を被る。イシニー族も矢張り先づ着物を脱いで、腹這になつて、這ひながら口へ砂をつめる。

クラツパートン氏に據れば、氏がカトゥンガの酋長に謁見した時、二十餘名の大官が何れも腰まで裸になつて、腹這になつたまゝ顔も胸も土まみれになつて酋長の傍へ這ひずつて行つて、始めて其處に坐つて酋長と言葉を交へる事を許されたのを見たと云ふ。

處が此の貴族等は又、自分が酋長に對してやる事を、同じやうに其の臣下のものに强ひる。バロンダ族の平民は、道で貴族の前へ出ると、四這になつて、體や手足に土をぬりつける。キアマ族も亦貴族の前へ出ると、急に地べたに横になる。

ダホメーの酋長の家では、臣下は玉座の二十歩以内に近よる事を禁ぜられて、ダクロと稱する老婆によつて、酋長への一切の取次ぎをして貰ふ。先づ其の取次を請ふ者は、ダクロの前へ四這になつて行く。そしてダクロは又四足になつて、酋長の前へ這つて行く。

四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

野蠻人の此の四這的奴隷根性を生んだのは、素より主人に對する奴隷の恐怖であつた。けれどもやがて此の恐怖心に、更に他の道德的要素が加はつて來た。即ち馴れるに從つてだん〳〵此の四這的行爲が苦痛でなくなつて、却つて其處に或る愉快を見出すやうになり、遂に宗教的崇拜とも云ふ可き尊敬の念に變つて了つた。本來人間の腦髓は、生物學的にさうなる性質のあるものである。

そして酋長は他の人間以上の或る者になつて了つた。

ナチエーの酋長は太陽の兄弟であつた。そして此の資格を以て、其の臣下の上に絶對權を握つてゐた。酋長の嗣子は生れると直ぐに、其の時母の乳房にすがつてゐる一切の嬰兒の主人であるとせられた。

中央亞弗利加に於ても、大中小の酋長は何れも皆神權を持つてゐて、自由に地水風火の原素を使役する。殊に雨を降らすに妙を得てゐる。

バツテル氏に據るに、ルアゴンでは畑に雨の必要があると、酋長に願つて空に弓を射て貰ふ。これは雲に其のつとめを命じさすのである。

そこで人民が酋長に雨乞を願ふと、酋長の方からは其の代りに租税を要求すると云ふやうな事が起きる。「羊を持つて來なければ雨は降らせぬ」などゝ威張る。又洪水の時などには、麥幾許を納めなければ水劫にあらしがあるなど、嚇す。

ブーサ族の酋長が、歐羅巴では一夫多妻を禁じてゐると聞いて、「外の人にはそれも善からうか、しかし酋長には怪しからん事だ」と云つたと云ふ。

アシヤンチ族の酋長は、一切の法律の上に超絶してゐて、酋長の子は何んな惡事をしても罰せられる事がない。そして臣下は酋長の爲めに死ぬ事を至上の義務と心得させられてゐる。

五

猶此の時代の野蠻人は、一般にごく御粗末な靈魂不滅觀を抱いてゐた。即ち人が死んだ後、猶幾許かの間、生きてゐるものと信じてゐた。死人の影が、地上の生活と同じやうな生活を、何處かで續けてゐるものと信じてゐた。

そして此の天上の生活は、殊に大人物にのみ限られてゐた。平民や奴隷は此の世限りで死んで了ふのである。そこで大小の酋長が死ぬと、食物だの、武器だの、奴隷だの、女だのと、いろ〳〵なものが其の未來の生活に伴つて行く。

カライブ族の酋長が死んだ時に、其の妻の一人が一緒に葬られた。彼女は此の酋長の子を幾人か生んだと云ふので、殊に此の役目に擢ばれたのである。

嘗つて布哇で、布哇ナポレオンと稱せられた、大虐殺王タメハメハの死んだ時などは、大勢の人間の强制的犧牲を供へたのみならず、猶無數の忠良な臣下が自殺し又は自ら傷つけて不具になつた。そして其の後數年間、國民は毎年其の日に糸切齒を拔いて、タメハメハを祭つた。

ベナン族の酋長の葬式には、墓の側に德利形の大きな深い穴を掘つて、其の口から大勢の奴隷や召使を投り込んで、其處に餓死さして了ふ。

アシヤンチの酋長が死ぬと、其の親族の者は外に走つて出て、手あたり次第に道に會ふ人々を殺す。それから數百又は數千の奴隷の首をしめる。そして時々又、何にか事のある度に、天上の酋長に使ひする爲めに、幾多の奴隷を殺す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

六

僕は餘りに馬鹿々々しい事實を列擧して來た。今時こんな事を言つて、何んの爲めになるのかと思はれるやうな、ベラボーな事實を列擧して來た。けれども猶僕に一言の結論を許して戴きたい。

主人に喜ばれる、主人に盲從する、主人を崇拜する。これが全社會組織の暴力と恐怖との上に築かれた、原始時代からホンの近代に至るまでの、殆んど唯一の大道德律であつたのである。

そして此の道德律が人類の腦髓の中に、容易に消え去る事の出來ない、深い溝を穿つて了つた。服從を基礎とする今日の一切の道德は、要するに此の奴隷根性のお名殘りである。

政府の形式を變へたり、憲法の條文を改めたりするのは、何でもない仕事である。けれども過去數萬年或は數十萬年の間、吾々人類の腦髓に刻み込まれた此の奴隷根性を消え去らしめる事は、中々に容易な事業ぢやない。けれども眞に吾々が自由人たらんが爲めには、どうしても此の事業は完成しなければならぬ。

石川三四郎に送る

榮

もう五六年の昔になるんだね。

例の巣鴨の丁度隣り合つた室にゐて、そして間だの壁一つ隔てゝ机を据えつけて置いて、其の壁に釘でもつて小さな穴をあけて、君が向うから口をあてゝ何にか云へば僕がこつちから耳をあてゝ聞く、と云ふやうな風で、看守の眼と耳とを窃んでは隨分お喋舌りをして日を暮らした。

其のうちに僕は一寸君を殘して置いて社會に出たが、一二ヶ月して、こんどは堺のオヤヂと連れ立つて行つて、三人して暫く又隣り同士の隨分腕白な生活をした。そして二人の間に挾まつてゐた君は、あつちへ行つちやお喋舌りし、こつちへ來ちやお喋舌りして、何うかすると兩方から一緒に呼ばれるんで、轉手古舞をして騷いでゐた事があつたぢやないか。

しかしそれも長い間ぢやなかつた。やがて又、再び君を鬼界が島に殘して、堺と僕とは京に歸つた。

かうして僕等が出たり入つたりしてゐる間に、君はしきりに「西洋社會運動史」の稿を續けてゐた。そして例の壁の穴からの話しに、よく君は、今迄西洋人の書いた本と全く違つた方法でやつて見たい、などゝ云つてゐた。

其の時の一年あまりの苦心の大著が、四五年の後の今日になつて、やうやく世の中に出たかと思ふと、すぐ檬暗の中に葬られて了つた。

しかし、これは素より君も覺悟の上の事と思ふ。僕も亦、敢て君にお悔みを云はうとは思はない。寧ろ其の一週間ばかりの生命をお祝ひしたい。

花を咲けば直ぐに枯れて了ふ草がある。けれども草の生の擴充の爲めには、どうしても咲かなければならぬのだ。

■次號豫告■

羞恥と貞操(評論)	大杉榮
ヘツダと境遇(評論)	安成貞雄
未定	小原愼三
未定	佐藤綠葉
黑(小說)	士岐哀果
人と超人(脚本)	和氣律次郎
藝術か戰鬪か(感想)	堺利彦
	荒畑寒村

ワイルドの社會觀

山本飼山

オスカー・ワイルドの著『ソーシャリズムの下に於ける人間の精神』の中からワイルドの社會觀を瞥見する事の出來る箇所を左に少しく節錄して見やう。

人々は貧乏と云ふ問題を解決するに當つて、貧乏人を長生させやうと試み、或は更に進歩したる學派に在ては、貧乏人を樂しませうと試みて居る。然し斯くの如きは解決でない、只困難を增すのみである。眞の目的は貧乏を不可能ならしむる如き基礎の上に社會を再建するのである。而して今日迄愛他的道德は眞に此の目的の實行を妨げて居た。最も惡しき奴隷所有者は其の奴隷に親切で、力めて奴隷制度の慘狀を除かうとした人々であつたと同じく、英國現今の狀態に於ては、最も多く害惡を爲す者は最も多く善を爲さんと試むる人々である。

ソーシャリズム其物は、それが個人主義を導くが故にのみ價値あるものである。

……必要なるは個人主義である。もしソーシャリズムがオーソリタリアンであるならば、即ち今日の政府が政治的權力を以て裝はるゝ如くに 他日の政府が經濟的權力を以て裝はるゝならば、即ち一言にて之を云へば、産業的專制政治が出現するならば、人類の終の狀態は其初めの狀態よりも更に惡しくなるであらう。現今にては、私有財産制度の存在する結果として、其の便宜を有する多くの人は甚だ狹い範圍ながら個人主義を進歩發展させる事が出來る。彼等は生活の爲めに働く必要もなく、又眞に自分に適し自分に快樂を與ふる活動範圍を撰む事も出來る。詩人、哲學者、科學者、教育ある人々の如きはそれである――一言にして云へば彼等は眞の人間、即ち自己を實現したる人であつて、此等の人に於て全人生はその部分的實現を遂ぐるのである。

困苦と貧窮とは人を甚だしく墮落せしめ、人間の性情の上に驚くべき痲痺的結果を及ぼすものであつて、これが爲めに如何なる階級をも自分自身の災害を眞に自覺し得ないやうになる。彼等は他の階級の人々に依てその災害を警告せられねばならぬ。而して彼等は屢々此の警告を全然信用しないのである。大雇主が煽動者に反對して云ふ所の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

言は疑もなく眞實である。煽動者とは干渉好きな挿出口をする人々の一團を云ふ。彼等は全く滿足して居る社會の或る階級の上に下つて來て、彼等の間に不平不滿の種を蒔いて行く。是れ煽動者の極めて必要なる所以である。彼等無くむば、今日の不完全なる社會狀態に於ては、文明の發展を見るのが出來ぬのであらう。

亞米利加で奴隷制度の覆へされたのは、奴隷の側に何等かの運動があつた爲めでもなく、又は彼等が自己を自由にせねばならぬと云ふ要求を言明した爲めでもない。奴隷制度は、ボストン其他の地に於ける煽動者等の甚だしい不穩當な行爲に依て仆されたのである。而して彼等煽動者は奴隷でもなく、奴隷所有者でもなく、奴隷問題と眞に關係を有する者でもなかつた。松火に火を點じ全運動の先驅となつたのは疑もなく廢止論者(アボリシヨニスト)であつた而して不思議に思はるゝのは、奴隷自身が煽動者に些細の幇助も與へず、同情すらしなかつたと云ふのである。而して南北戰爭が終つて奴隷が自己の自由を發見した時に、即ち餓死する程に自由になつたのを發見した時に、彼等は新社會狀態を切に歎いたのである。

思想家に取つて佛蘭西革命史中最も痛ましく感ぜらるゝ事實は、マリー・アントアネットが王妃たるが爲めに殺されたのではなくして、ヴアンデ地方の饑餓に頻せる農民が惡むべき封建制度の維持の爲めに一身を捧げた事である。

予は今日のソーシヤリストが眞顔で次のやうな事を提議するだらうとは思はない、即ち一人の巡視官が毎朝家々を訪うて市民が一日八時間の手足の勞働に從事して居るか否かを調べるやうな制度を設ければならぬと。人類は已に斯かる時代を經過して了つた。而して今は只或る人々、即ち人類が勝手に之を犯罪人と呼んで居る人々の爲めに斯かる生活法が殘されて居る。

プライヴエート・プロパーテーが廢止されたならば眞の、美しい健在な個人主義を我等は有するに至るであらう。何人も事物及び事物の表象を集める事に生涯を費さぬであらう。人は生きるであらう。生きると云ふ事、是れ世の中に於て最も稀な事である。多くの人は只存在して居る、只それ丈けである。

藝術と云ふ想像的な部面は例外として、人格の

完全なる表現を我等は曾て他に見た事があるであらうか。實際の行爲に於て我等は之を曾て見た事がなかつた。モムゼンは云ふ、シーザーは圓滿完全なる人であつたと。然し如何にシーザーは痛ましくも不安な地に立つて居たであらう！　權力を揮ふ人のある所には必ず權力に反抗する人があるシーザーは完全な人であつた、然し彼れの完全は極めて危險なる道を旅して居た。マーカス・オーレリアスは完全な人であつたとルナンは云ふ。然り彼れ大帝は完全なる人であつた。然し如何に數限りもない要求が彼れの上に堪へ得ぬ程加へられたであらう！　彼は帝國と云ふ重荷の下でよろめいて居た。彼は一箇の人間が、彼のタイタンの重さと餘りに廣い軌道とに堪へ得るものでない事を自覺して居た。

予の云ふ完全なる人とは完全なる境遇の下に發達する人を云ふのである、傷つかざる人、苦悶せざる人、不具ならざる人、危險の地にあらざる人である。多くの人は反抗せざるを得ないやうにさせられる。彼等の精力の半分は不和軋轢に費やされて了ふ。………完全なる人格の記號は反抗ではない、平和である。

我等が小學校生徒用の誤記された歷史に非ざる、各時代の正しき典據に依て書かれたる歷史を繙く時に、我等をして最も痛ましく思はしむるのは、惡人が犯したる罪ではなくして、善人が惡人の上に加へたる刑罰である。而して社會は罪の發生に依てよりも刑罰の常用に依て遙かに殘忍にさせられる。刑罰が多く加へられゝば加へらるゝ程非が增すのは明かな事である。而して最近代の政治は明かに此の事實を認めて、出來得る限り刑罰を減ずる事を其の任務として居る。政府が眞に刑罰を減じた所では常に必ず好結果を得て居る。刑罰が少なくなるにつれて罪も亦少なくなる。もし全く刑罰が廢止されたならば罪は消滅するであらう、よし罪の發生を見る事があつても、それは醫者に依て精神錯亂の悲しむべき一現象として取扱はれ、注意と親切とに依て癒やされるであらう。何となれば今日罪人と呼ばるゝ所のものは決して罪人ではない。近世の犯罪を生むものは饑餓であつて罪惡ではない。是れ實に今日の罪人を一階級として見る時、其處に何等の心理學的興味を見出さない理由である。

個人主義が實現される時には人類は亦た同情心を實現し之を自由に自然に行使するであらう。今日に至る迄人類は殆ど全く同情心を培養しなかつた。人類は只苦痛に對して同情を有するのみであつた。而して苦痛に對する同情は同情の最高なるも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

のではない。總ての同情は美しい、然し不幸に對する同情は美の最も少なきものである。斯かる同情は利己主義の色彩を帶び、病的の傾向を有して居る。其中には自分自身の安全に對する恐怖の要素が含まれて居る。

苦痛に對する同情は人類最初の本能の一である個人的なる動物、即ち高等動物は我等と共に此種の同情を分つ。然し記憶すべきは次の一點である即ち快樂に對する同情は世の中に於ける快樂の量を增すけれども、苦痛に對する同情は實際に苦痛の量を減ずるものではない。苦痛に對する同情は人をして禍害に耐えしむるかも知れぬ、然し禍害は依然として殘つて居る。肺病に同情する事は肺病を癒やさない。之を癒やすのは科學である。而してソーシャリズムが貧困の問題を解決し、科學が病氣の問題を解決した曉には、哀傷家の領分は縮小せられ、人類の同情心は大きくなり、健全になり、自然になるであらう。人類は他人の樂しき生活を觀照(コンテンプレート)する事を以て快樂とするであらう。

新刊紹介

■おもひで　（松井松葉譯）

獨乙のウキルヘルム、マイエル、フエルスタアの「アルト、ハイデルベルヒ」の飜譯である。憂鬱な、規則づくめな、寂しい宮殿内の生活から離れて、ハイデルベルヒの大學に遊學し、オプンハートな青年の間に、樂しい青春の日を送つて居た太公の世嗣が、父太公の死に會つて再び宮殿に歸り、結婚の間際に密かに宮殿を拔け出でゝハイデルベルヒに到り、昔の學校友達と馴染の酒屋にビールを酌み交し、戀し合つた娘と相擁いて短かき青春、果敢なき歡樂、慰さめ無く樂しみ無き王侯の生活を語つて嘆くといふ筋、二月一日から有樂座で開演する文藝協會の脚本である。極めて感傷的な甘い物ではあるが、ハイデルベルヒの學生生活なども窺はれて却々面白い。（金九十五錢　麹町區平河町五の五近代文藝社）

■留　女　（志賀直哉著）

雜誌白樺の全人中に在つて、本書の著者は最も豊かな創作の天分を有しても居るし、また他の人々に欠いて居る熱情と、社會的興味をも可なりに有して居る。「剃刀」はチエホフの短篇にも此に似たものがある。「クローデイヤスの日記」はハムレットの裏をサイコロヂカルに描いたとも云ふべきもの、「正義派」は同じ作者の「大津順吉」と共に、最も多く社會的興味を見出すものである。一卷十篇、記者は以上の三作を一番面白く讀んだ。（金一圓　麹町二の二洛陽堂）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

本當に怒れない男

伊庭孝

男。今日は。

女。今日は。此の間は隨分ですね。わたしはあなたから、あんな事をされる覺えはないのですよ。わたしは本當に腹が立つて、腹が立つて堪らなかつたのでしたわ。

男。それはさうだらう。私も貴女が腹を立つてゐないとは思へないからね。腹を立てるのが當り前なのだ。それだから、それでいゝのだ。

女。それではわたしを怒らせやうと思つて、あゝいふ事を爲たのですね。あの方を連れて來て下さいと云つた事が、どうして癪にさわつたのでせうさうしてあの方を連れて來たなり、いきなりプイと立つて歸つてしまふといふのは、隨分人を馬鹿にした爲方ですわ。あの方だつて、後でどんなに氣まづかつたか判りやしませんよ。貴方のお考では、あの方と私とを差向にさせて置いて、さうして自分丈け腹を立てゝゐたかつたのでせう。

男。私がそんな嫉妬心があらうとは、どうしても思へないよ。私は貴女が誰に會ひたがらうと、私にとつては何でもないのだ。いゝや却て、貴女の知人の中に、金のある、地位のある、容貌の立派な紳士が見附かつたら、シャムパニュでも拔いて祝杯を擧げ度い位のものだ。

女。然しきつと何かわたしの事を怒つてゐらつしやるでせう。

男。私は怒らなければならない筈だと思つてゐるのだが、實際は怒つてゐないのだ。

女。何をいつていらつしやるのよ。きつとわたしの事を、蔑すむ位は爲てゐらつしやるのだわ。きつとさうよ。

男。私はね、女を蔑すむといふ事を爲た事はないのだ。

女。いゝえ。わたしが貴方を初めて見た時分は、貴方はわたしを蔑すんでゐらつしたのよ。それは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

よくわかつてゐますわ。

男。それはさうかも知れない。私は初對面の人はいきなり尊敬するといふ譯にはいかないのだ。敢て貴女を輕蔑したといふ意味ではなかつたのだ然し其後で私は貴女を充分尊敬したつもりでゐる。

女。それは能くわかりますわ。

男。それ位は判つてゐて吳れなければ私もやり切れないと云ふものだ、貴女が私を愛し出したから私も貴女を尊敬するやうになつたのだ。

女。でも普通男は自分に惚れてゐる女を蔑すむものですわ。

男。私はそれは爲ないのだ。

女。それだから私が可哀く思ふのですわ。

男。それは有り難い仕合せだ。然し大抵の女は、自分が輕蔑されてゐないと思ふと、隨分我儘を振舞ふものだね。

女。それはどうしても淺墓ですから。

男。それだから男と云ふものは、女を蔑すんでゐないと、時々は甚しい侮辱を女から受けるのだ。と云つて私は、女から侮辱を受けない爲めの豫防法として、女を輕蔑して置くと云ふやうな術數は爲たくないのでね。少くも私はさう云ふ方針なのだよ。

女。さうだつたのでせうね。

男。それだから私は、私の立場と云ふものを女の人に了解だけは爲てゐて貰ひ度いと想ふのだ。女をしよつちう輕蔑してゐる人が、時々は女から、手ひどい侮辱を受ける事があると、それは女から復讐されたと云ふ事になつて、隨分はたから見てゐても、痛快に思ふ事もあるよ。

女。それは痛快なのですよ。然し其痛快の爲に、女は隨分五十年の命を抛つてしまふのですわ。

男。然しそれは平生女を輕蔑してゐる人に向つて爲す可き事で、私のやうな男に向つて爲す可き事では斷じてない。

女。貴方は女を尊敬してゐる人だからと云ふのですか。

男。いゝや、私は何も女を尊敬してゐるとは云はない。たゞ私は女と云ふものに對して、丁度道傍に轉がつてゐる芋虫を踏み潰す程に思つてゐない男程、女を殘酷に取扱つた覺えはないのだ。

女。それは然うですとも。

男。だから私にむかつては、どの女も復讐をする必要はないのだよ、男が女をだまして、子供を生ませたなら、女は男の所へ怒鳴り込んでも宜からうさ。然し女の方から云ひ寄つたのなら怒鳴る權利はないのだからね。まあさう云つた理窟だらう。

女。それはさうですとも。

男。然し女と云ふものは、しよつちう男に輕蔑されてゐるもんだから、男に反抗する事をゑらい事だと思つてゐるのだね。それだから相手の見界もなく、男に喰つてかゝるのだ。さういふ時には、私は、何といふ考への淺い女だらうと、可哀さうに思はずにはゐられないのだよ。

女。さうして其時其女を蔑すむのでせうねえ。

男。蔑すみは爲ない。たゞ何となく悲しく思ふのだ。その女の爲めにも悲しく思ふし、また私がそれ迄其の女の爲めに捧げてやつた私の心盡しを思つて悲しくなるのだ。

女。本當に悲しくつて。

男。本當に悲しいね。私はさういふ時に本當に絶え入るやうな思ひがするのだよ。それでは復讐ではなくて、謀叛だからね、少くとも私に對する場合はねえ。

女。私がさういふ事を爲たでせうか。

男。…………

女。若し私がさういふ事を爲たといふなら。

男。…………

女。私は、そんな事は爲ないつもりよ。

男。ともかく私は、氣が弱いのだから、人の前でお前は馬鹿だといふ事の出來ない人間なのだ。それだけれども、もう少し勉強して貰ひ度かつたよ位は言ひたいと思つてゐる。

女。わたしの馬鹿は貴方も充分御承知の上におつきあひ下さるのではありませんか。わたしが何もあなたに惡る氣があつたわけではなし、ほんの一時のむら心ですわ。それが復讎だの、謀叛だのと仰有られては、無論、さう仰有られても爲方がないけれども、そんな氣ではないのですから、わたしの惡い處はあやまりますわ。

男。あやまる事は何もないのさ。またあやまられては困ると思つて、私は暫く貴女に會はなかつたのだ。あやまるといふやうな事は、斯ういふ場合にするものではない。人に頼まれて、御豆腐を買

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ひにいつて、歸りに手がすべつて、御豆腐を落してしまつたといふやうな時、どうも濟みません、つい手がすべつてといふのだ。それがあやまるのだ。

女。だけれども惡かつたと思つてゐれば、あやまらずにはゐられませんわ。

男。惡いとか、善いとか云ふ問題ではないのだ。性分から來るのだからな。男の顏を見るとしつぺい返しをせずにゐられないといふ性分の女は、所謂强い女で、私の考へてゐるやうなやさしみといふやうなものを持つ事は出來ないのだ。其代りには、强い男を手玉にとつて、隨分氣隨も榮華も出來るだらう。私はそういふ女は、男に生れなかつたのが幸だつたらうと思ふのだ。さういふ女は、えて男に生れたかつたといふものだが、そんな殺伐な性分の者が男に生れてゐたら、無人島で暮さなければならぬやうな運命になるだらうよ。女に生れたればこそ、私のやうな力のない者は勿論のこと、强い者までも叩きつけて、凱歌を奏してゐられるのだ。

女。わたしは馬鹿ですけれども、どうして然んな向ふ見ずな事を爲ませう。貴方がどういふ人で、誰がどう云ふ人で、誰には斯うしてやつても、誰にはどう爲なければならぬ位は考へてゐるのですわ。

男。さあ、それが性分でね。私のやうな人間は、やはり斯ういつた感情の脆い女と一所に巣を喰ふのが宜いので、貴方のやうな强い女は、やはり强い、働のある、そして女を頭から蔑まうとしてゐる男の友達となるのが宜いのだらう。

女。どうせさうでせう。そうして私などは、末はどうなるか判らないのです。人に見えない處で死に絶えるばかりです。

男。そんな事があるものか。それは兎も角、私は愛す可からざる者を愛したのだから、其報いは受けねばならぬ。今迄長い間、隨分私としては色々の事を辛抱して來た。然し、今はもう昔の私の世界へ歸り度いのだ。貴女を貴女の世界の人に引渡したいのだ。

女。そんな事を云つて、あなた迄が私を棄てゝおしまひになるのですね。今迄私は斯う云ふ目に遇つた事はないのですよ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ら。棄てるのだと、どうして棄てるのだらう。棄てるには、一旦手の中に握つてゐた筈ではないか然し貴女は一度も私の手に握られてゐなかつたのだ。私は前から貴女を見てゐた、今でも見てゐる恐らく死ぬ迄貴女を見てゐるだらう。それで充分だつたのだ。それだのに、貴女は、ふとしたむら氣から私を手まねきしたのだ。それで私が傍へ寄つて見た。さうしたら、貴女は强い鞭で私を打つたのだ。鞭を持つてゐる人の處へ行くのは、行く方が惡い、打つた貴女に罪はない。私はたゞ、私の居る可き座敷から貴女を見てゐるのだ、それが何で冷淡な行爲だらう。

女」でも傍へ寄つて下すつたつて宜いでせう。

男」傍へ寄つたら、又鞭で打つだらう。私は貴女のおいで〳〵が恐ろしくて堪らないのだ。それだから、わたしは、貴女が何か私の事を怒つて呉れゝば宜いと思つてゐる。然し仲々私の力には出來ない。斯うしてゐる間にも、鞭で貴女の頰邊でも打つてやりたい程だけれども、それが私には出來ない。それが私には出來ない。

——大正二年一月十日——

ホワイト・テロル

寒村

十二月の十八日、モスクワ府はゴルバチイ橋の傍。一士官が率ひた兵士の一群、大なる興奮、冗談、叫び、手眞似、滿足らしい顏付。一學生が彼等に捉へられたのである。

『さあ皆な除いた、除いた、是から始めるゾ』士官は叫んで云つた。そして學生の方を向いて、『おい、ズボンを除れッ。』と命じた。學生は蒼い顏をして、默つて、身動きもしなかつた。

『ズボンを除らんかッ』士官は怒つて叫んだが、學生は雪よりも白い顏に一點の血をも上さず、依然として動かなかつた。只だ默つて、恐怖せる眼で見廻したが、何處を見ても、己れを苦しむる者の勝ち誇つた顏ばかりだつた。彼は頭を垂れた、そして前の如く默つて居た。

『よし、ぢや親愛なる學生君の御手傳ひをして上げるかネ。可愛想に　手が寒さにカヂかんで、

云ふ事を聞かないのだらう。』士官は急にもの優しい猫撫で聲を出して、面白さうに學生の顔を眺めた。

『その可愛らしい、小さなズボンを除れ。』兵士は士官の命令のまにまに、ボタンを外してズボンを剝ぎ除つて了つたが、それでも學生は拒まなかつた。すると、彼は地面へツ、轉ばされた。

『さあ、撲れッ。』二人の頑丈な兵士は、手に手に鞭々提さげて歩み寄つた。

　鞭撻は始まつた。兵士等は大笑ひをしたり、馬鹿口を叩いたり。騒いだりしながら、隨分長い間觀物した。學生は始終默つた儘、顔を雪に埋めて横はつて居た。彼は間斷なしに『如何だ、いゝ心地か』などと問はれ、そして頭を靴で蹴付けられた。

『止めッ』遂に士官は叫んだ。その時は學生の全身は既に血塗れとなつて居たが、亢奮し切つた兵士は、却々すぐには止めなかつた。

『隊長殿、私達にも少しやらせて下さい。』歩兵等は士官に敬禮しながら、ニコニコとして乞ふた。

『よし、やるがいゝ。』と、士官は親切に許してやつた。

　二人の兵士は亦、袖を捲り上げながら、血だらけの鞭を押つ取つて、再び學生を撲り初めた。然し學生は、前のやうに一語をも發する事なく、雪の中に横はつて居た。只だ彼の身體のみは、兵士等の亢奮が益々烈しくなり、上げては打ち降す鞭が愈々急になるに連れて本能的に震へた。

『隊長殿、私達もやつて見たうムいます。』龍騎兵の或る者が性急に口を出した。そして士官の許しを受くるや否や、歩兵に替つて新しい力と熱心とを以て鞭撻を續けた。學生は猶ほ先の如く堅く地に臥し、その赤軀のみを微かに慄はせて居た。

『如何だい、奴さんすつかり、最高教育といふのを受けちやつたネ。』やつと鞭撻が終つて　雪中に横はる學生の軀が動かなくなつたのを見て、兵士等の中でこう冗談を云つた者がある。

　然し乍ら、彼は鞭で打ち殺されたのではなかつた。彼はそれから向ふ河岸に引つ立てられて、そこで遂に銃殺された。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

共和祭

ジャン・ジュリエン作
大杉榮譯

一

今日は工場も休みなので、デユムーレンはゆつくり朝寢をするつもりでゐた。それだのに未だ夜が明けるか明けない中から、女房のメラニーが大騷ぎをして掃除をし出した。椅子テーブルをひつくり返へすやら、床板をこすり廻るやら、ギーギー戸を鳴らし立てるやら、小供達を泣きわめかすやら、まるで家ん中と喧嘩をしてゐるやうだ。とうとう亭主の室に入つて來て、窓掛を一つぱいに開けひろげた。デユムーレンは堪らえ切れなくなつて、寢床の上に起き上つた。

「オイ〳〵、もう騷ぎは濟んだんかい。それに何にして此處へ來たんだい。」

「國旗を出さなくつちや。」

「なに、國旗を出すんだつて？　お前も馬鹿ぢやねえか。すぐ俺れがひつぱづしてやる事も知らねえぢやねえになあ。」

「だつて今日は共和祭ぢやないか。」

「フン、お人好しどものお祭だ。いゝからまあ寢かしといてくれ。」

「だけど。」

「だけど何んだ。」

「何處のうちだつて皆んな國旗を出してゐるぢやないか。」

「さうよ、皆んなそりやお人好しだからよ。おい、メラニー！」と彼れは寢床の上に座り直つた。「お前はな、俺れが、此のデユムーレンが、お上のお祭をすると思つてゐるんかい。」

「だつて共和政府のお上ぢやないか。」

「自分達が鱈腹になつた時にや、皆んなが矢つ張り鱈腹だと思つてやがる奴等の共和政府だ。奸物共の共和政府だ。いかさま屋の共和政府だ。奴等がにせ者で、虚言つ吐きで、我利々々で、無法者で、そして惡者だつた化の皮は、奴等がとうに自分でひつぱいちやつた。共和政府が何んでえ。俺等は矢つ張り坊主の汚ねえ足許にうづくまつてゐるぢやねえか。金持は矢つ張り俺等の主人ぢやねえか。俺等は矢つ張り俺等の勞働でもつて、なまけ者や役人共をあぶら肥しにしてゐるぢやねえか。そして奴等は、俺等を犬か何んぞのやうに思やがつて、しよつ中足蹴にしやうとしてやがるぢ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

やれえか。奴等の共和國は俺等の共和國ぢやれえや。俺等の共和國ぢや皆んなが自分で自分の仕事をするんだ。そして朝寢でもしやうと思つたら、嬶なんぞは外へ遊びに出してやるんだ。」

　デュムーレンはこれですつかり女房を說伏せた積で、再び枕の上に頭を置いた。けれども其自由平等博愛の國に遊んでゐる甘い夢を始めるか始めない中に怱ちけたゝましい叫聲が耳に響いた。

「お前さんてば、お前さんてば！　早く起きて來て御覽よ。」

「やかましいなあ。」

「まあ何んて奇麗なんだか、表を見に來て御覽よ。」

「それや分つてらあな。棒を突つ立て　、其の尖に更紗の片をひつ付けたんだらう。そして晩になれば提灯を點けて、花火をあげるてんだらう。共和政府が平民を馬鹿騷ぎさして嬉しがらせるのは、今迄の處大がいそんなもんだ」

「ぢやお前さんは今日一日うちにゐやうてんだね。外へは出ないんだね。」

「俺れや斯うしてひつ込んでてお上に反抗するんだ。命令的の愉快なざあ俺等大嫌だつて事よ。それにそんな賑かし種にやもう見飽きたつて事を斯うしてお上に見せてやるんだ。俺等は毎年々々のそんな金鍍や擬金襴の展覽會みたよなものよか、もつと確かな本當の愉快をお上に賴みてえんだ。皆んなが俺れのやうにしてゐれや俺等もこんなにや馬鹿にもされれえんだがなあ。」

「でも私小供達にね、お前さんが皆んなを觀兵式に連れてくつて云つて置いたんだもの。」

「何に？　觀兵式へ？　此の俺れが？　そんならのは俺れやもう兵隊の時に飽き〳〵しちやつた。」

「觀兵式がそんなに厭やなんなら、せめて大通りへでも連れてつておくれよ。まさかお前さんは小供達から此の樂しみをひつたくつて了ひやしまいね。」

二

　晝になつてから、デュムーレンが上衣を着るまでと云つたら、まるで御話だ。彼れは仕事着のままで出掛けると云ひ張る。そして女房や子供達がよそ行を着て了つたと云ふので、仕方なしに我を折つた。それに丁度休みで來てゐた姪も連れて行き、ジョゲー婆さんの處へも寄る事になつた。お負けに眼が惡くつて獨りで步けない隣りのヴリニアン爺さんまでが、一緒に連れて行つてくれと云ふ。こんな事ではほんの一寸の散步の筈のが、本當の行列になつて了つた。

　もう近所の人は皆んな大通へ出掛けて了つた。デュムーレン一家は一列になつて、相續いて行つた。子供達はもう嬉しくて堪らない。何にかの飾り物の處へ來ると、有頂天になつて立止まる。そうして親爺の袖をひつぱつては『これを御覽よ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『おれを御覽よ』と騒ぎ立てる。其のたんびにデュムレーンは肩を上げてセヽラ笑つてゐる。やがて亞米利加帽を被つた、だんだら染の襯衣を著た若者の一隊が、喇叭を先頭にして遣つて來た。これはカルナバルの仲士の古風な裝なんだ。

「これに牡牛がゐれや、すつかりそろうんだ。」

とデュムーレンが叫び出した。

「牡牛は何處へ行つたの？　お父さん。」

「今は皆んな田舎にゐるんだ。巴里にや氣違ひのやうになつた牝牛しか殘つてやしれえ。』

「だが見ろよ、まあ見ろよ。まるで人の黑山だ。』

ヴィニアンは仰天してゐる。

『さうだよ。丁度いゝ羊の群だ。』

デュムーレンも同じやうな事を云つてゐる。

それから去年よりも人出が多いか少ないかの議論になつた。メラニーは多いと云ひ、デュムーレンは勿論少ないと云ひ張る。たゞジョゲー婆さんはクス〳〵泣いてゐる。お婆さんは兵隊を見るたんびに、トンキンで殺された息子の事を思ひ出さずにやゐられなかつた。

けれども群集は益々混雜して來た、益々騒々しくなつて來た。皆んなたゞ理もなく笑つて、自分ながら自分の上機嫌なのに驚きながら、お互ひに顔を見合つては滿足してゐる。群集の頭の上に翻つてゐる國旗は、妙に皆んなをそゝのかして、パッパッと音を立てるたびに、群集は万歳を叫ぶ。此の一般の陽氣な空氣には、いかなる頑固者と雖も折れて了はざるを得ない。デュムーレンも上衣を腕にひつかけたまゝ、以前のにがい顔付はなくなつて、今はもう大きな聲で快活に喋つてゐる。

蓋し此のお祭は、彼れが思つた程厭なものではなかつた。そして彼等は葡萄酒屋で一杯やつて、イルミネーションを見る事になつた。

何處の葡萄酒屋も皆んな溢れるやうになつてゐる。テーブルは人道から溝の處までも侵入してゐる。けれども一寸待つたゞけでデュムーレン一家は席を見出す事が出來た。皆んな飲んだ。大いに飲んだ。そして益々上機嫌になつた。全く上機嫌になつて了つた。デュムーレンはもう政府者の事などは思はない。隣りの席の人達と一緒になつて軍歌などを歌つてゐる。そしてジョゲー婆さんが幾度も〳〵死んだ息子の事を話さうとするのを、無理やりに默らして了つた。

「今日のやうな日に愁歎話は一切抜きだ。そして皆んな愉快に遊ぶんだ。」

夜になつた。イルミネーションが始つた。樹の上にも枝の上にも、大きな黄色の球に火が點いて、何にか斯う光る果物が湖に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

でも映つてゐるやうに見える。三色ガラスの瓦斯の火が、公園の小徑々々を色彩つた。三色の火の旗が樹の切株の黒い上を照らしてゐる。電球は薮の中に白光を漲らして、春の木の葉を見せてゐる。四方八方からいろんな音樂の音が舞踏に合奏してゐる。そして黄金の火の箭が空にあがつては、それが青、白、赤の星の雨になつて開く。

此の花火のあがる度毎に、急に群集はどよめきを止めて、只ヤア〳〵と云つて大風のやうな喝采を擧げてゐる。群集は爆發の音と、ベンガル花火の赤い焔とに夢中になつて、そして自分の叫喚の聲に醉つて了てゐる。流石のデユムーレンもすつかり參つて了つた。そして今はいつでも資本家や政治家に味方するやうな氣分になつて了つた。

最後の火の箭があがつた。今迄歌つたりわめいたりしてゐた群集が、どや〳〵と動き出した。皆んながてんでに出口を求めて、皆んなでお互ひに道をふさいでゐる。押し合ふ、あばれる、叫ぶ、まるで狂氣の沙汰だ。そしてフライや葡萄酒の臭の立つ、此の埃と煙との重い空氣の中に、激し切つた人々の身體から、情慾の慄きが立ちのぼつて來る。姪は若い男共に傍から押されたり突かれたりして、散々に冷かされてゐる。デユムーレンも何處かの女にからかつてゐたが、女房がブツブツ小言を云ふので、其の腰の處を抱いて、其邊に舞踏をしてゐた一隊の中に入つて、一緒に踊らうと騷ぎ出した。が、メラニーはやつとの事で遁げ出した。

「もう歸らうよ。隨分遲くなつたから。」

「何んだと？ それでもお前は忠良な市民か。お前は今日の此の大紀念日を根限り祝はうとはしれえのか。俺れは何んと云つても歸られえ。」

こんな時にはよく友達に、それとも友達にならうと云ふ親切な人達に會ふものだ。顏を見たゞけで直ぐ知合になつて了ふ。そして又飲み合ふ。デユムーレンの連はいつ歸れる事かと待つてゐる。

ヴリニアンは相變らずまだ黑山だ〳〵と云つてゐる。姪はいやにふさぎ込んでゐる。ジヨゲー婆さんは默つて泣いてゐる。メラニーは疲れ切つた半眠りの子供達を抱へてゐる。そして亭主が益々愚圖ついて管を卷いてゐるので、ひどく怒つてその袖をひつぱるんだが、何んとも仕方がない。

遂に嗄がれた喇叭の聲と、重苦しい太鼓の音とが聞えて來た。そして長い竿の上によろめいて來るカンテラの火が見えた。

「サア、小供達あれを見ろ！。」

デユムーレンは斯う云つて、椅子の上に乘つて、聲をからして何んでも彼んでも皆んなが喝采する事に喝采してゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

改宗

荒畑寒村

明治――年――月――日、子爵陸軍中尉比良孝夫は、將校斥候の任務を帶び、數名の部下を率ゐて、N――村附近の偵察に赴いた。

秋とはまだ名のみなのに、高粱の葉は黄にすがれて、滿洲大陸の曉風は、身に沁み入るやうに寒かつた。太陽はまだ高く昇らず、灰色の靄深く立ち罩めて、五歩の前は高粱が盡きて平原となるのか、大江が聲もなく流れて居るのか、丘陵が起伏して居るのか、それとも厚い土壁を回らして、鷄と豚を飼ふ土民の住家が點在して居るのか、模糊としてまるで夢を辿るやうであつた。身を沒するやうな高粱を分けて進む中、中尉は急に前方に當つて、バサリ、バサリと、高粱を踏みしだきつゝ此方に近づき來る物音を聞いた。敵？　と思はず立ち止つて耳を澄すと、物音が漸く近づくに連れ朝寒の空氣に噓する馬の鼻息すら聞へて來た。愈々敵！　と知つた時には、一隊五人、貌見合せて立ち縮んだが、猶注意して馬の足音を數へると、確かに十騎には充たなかつた。中尉は心を落着けて考へた。敵騎は既に十數歩の距離に近づいて居る若し退却すれば物音で知られるは必定、さすれば敵は騎馬なり多數なれば、忽ち殲滅せしめらるゝも知れて居る。中尉は突嗟に思案して、密かに四名の兵に命じて折敷かせ、自分も短銃の彈機に指をかけて待つて居た。

物音は愈々近づいた。馬腹に當る拍車の音と共に、人の物云ふ聲さへも聞へたが、それは明らかにロシア語であつた。彼は一聲鋭く『打てッ』と叫んだ。轟然たる音は天地の寂寞を破つて、强い烟硝の香が、靄に濕つた高粱の莖にまつはつた。ドサッと重い地響きがしたと思ふと、土を蹴つて飛び却るやうな音がした。そして驚駭した叫び聲と共に、驀然として敵騎は逃走した。中尉は兵を顧みた。四名とも折敷いた儘、固くなつて銃を搆

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

へて居る。中尉は堪らなくお可笑くなつて、『ムッハ……………』と大聲を上げて笑つた。兵も一緒に痙攣的な笑ひをした。中尉は終ひには、涙が止め度なく流れて、横腹が痛くなる程笑つた。

やがて兵の一人が、何か呻き聲がすると云ひ出した。或は？　と思つて捜索すると、果して一人の若いコサック兵が、胸に彈丸を二發受けて、虫の息で呻いて居た。是が自分の初めて殺した人間かと思ふと、中尉はお可笑いやうな、氣の毒なやうな感がした。そして何ルーブルかの金と、銅製の小形な十字架が、その內隱しから現はれた時、中尉は出征の際、母が諸處の神社の護符の入つた守り袋を、無理に持たせた事を思ひ出した。

『此奴も、死なうとは思はなかつたらうになア』と云つたが、フト寂しい想ひが胸を閉して、もう再び笑ふ氣にはなれなかつた。

生れて初めて人を殺した、怨みも仇も無い、貌さへも見知らぬ人間を殺した。此の考へは、それから日夜中尉に憑いて苦しました。中尉は己れの心弱さを恥ぢ怒りしたが、日を經るに從つて、その苦しみは益々強くなつた。そして此上、もつと大きな殺人の機會が備へられてあると思ふと、苦痛と恐怖とに身を燒かれる如く感じた。

R――總攻擊の前夜、中尉は將校仲間と一緒にウヰスキーを酌み交して居たが、フト自分の感情を裏切つた。

『馬鹿な事を云つてる！　敵を殺さなきや自分が殺されるじやないか、冗談じやないぜ。ハ…………』一人の中尉が聲高く笑つた

『敵、敵と云ふが、怨みも仇もない者が如何して敵になるのだ。先達て俺の殺した露兵なんか、まだ若い、髯も無い奴だつた。』中尉は深い嘆息を泄らした。

『個人には怨みがなくとも、國家が戰爭を開始すりや、國民は敵同志じやないか。…………いゝ事を敎へてやろ、中尉。明日戰場へ出たら、敵彈を喰つて死ぬんだ。そうすりや、その露助の遺族に對する君の義理も濟まア。ハ…………』上機嫌の少佐は、事も無げに云ひ放つて哄笑した。

翌日、中尉は耳の鼓膜を裂くやうな炸彈の響きの下に、彈丸の裂片が落ちる每に飛散する砂礫を浴びて、硝煙に閉された黃褐色の傾斜面を、狂せる如く叫びながら突貫した。やがて中尉の隊が、一の高處を占領すると、熱狂した將卒等は、銃を捧げ帽を振つて萬歲を絕叫した。灼くやうな午前の大陽に照され、碧色の軍服を血と泥に塗みらして、算を亂して橫はつて居る露兵の死屍の間に、中尉は獨り隊を離れて、呆然と劍を杖突いて立つて居た。

日となく、夜となく、中尉は恐ろしい惡行の反省に苛なまれながら、猶幾ヶ月か軍旅に從つて居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

たが、F――の激戰の際、遂にその左腕に負傷して內地に後送された。そして負傷が平癒すると同時に、軍職を辭して只だ一個の華族となつた。

子爵は今や○○を罪惡と信ずるばかりでなく、××が人間の良心を殘害し、感情を壞敗する事を深く感じた。そして人間の道德的最高義務を以て△△△△に在りとした過去の迷信は、最早や子爵の腦裡には影だも止めなかつた。然し今は、智識の普及に依て其迷信を破壞し、人民の生活を理性の上に築き上げねばならぬ。さすれば其の生活狀態は、必然に改善される筈であると確信するに至つた。かくて子爵は、社會に對つてその改宗を宣言する爲めに、一の著述を出さうと思ひ立つたので、所有地なるS――村の別莊に赴むいた。

夏の初めであつた。杜の樹々は、人の肌の汗すが如くに綠の若芽を吐き、下草は、髮を飾れる少女の如くに紅い花を着けて居た。柔かい日光は、木々の葉が吐き出すオゾーンに、醉つたやうになつて閃動し、小鳥共は再び收獲の多い季節が來た事を、自然の母に感謝するやうに唄ひわめいた。子爵は讀書と、思索と、執筆とに倦むと、いつも此の杜に入つては、其處此處と逍遙した。時には歌を唄つたり、また無意味に大聲を上げて叫ぶ事さへあつたが、鳥は些しも驚かずに、枝から枝を飛び交ふて居た。

或る日、子爵は杜の中の小逕を辿つて行くと、遂に田や畑の遠く展けて居る杜の緣に出端れた。子爵は綠色の植物が、微かに萌へ出でた畑の畔を、力無げに耕やして居る老ひた農夫を、見るともなく眺めて居た。不意に、耳近く馬の嘶きが起つた。吃驚して見廻すと、瘠せて骨立つた一頭の耕作馬が、頻りに樺の若芽を喰ひ荒して居た。子爵はそれを見ると無暗に腹が立つて、突然馬の鬣を引つ攫んだ。そして農夫の傍まで曳いて來ると、大聲で怒鳴り付けた。

「是アお前の馬か、何だつて放しとくんだ。見ろ、樺の若芽を皆な喰ひ荒しやがつて、木が枯れちまつたら如何する?」

農夫は默つて立つて居た。が、子爵が再三その不注意を詰責するので、慄え聲で云ひ譯した。

『……馬に喰せる物つちや、家にもありましれえもんで……』

「如何して? 馬はお前等の大切な仲間だゾ、殆んど家族の一人とも稱すべきものだ。それだのに、喰せるものが無いですむか?」

「俺等がうしてハア、もう何も食ふ物がありましれえ……」

「眞實かそれア。如何したんだ一體……』子爵は吃驚して尋れた。

「眞實かと?……」老農夫は、自分の耳を疑ふかのやうに問ひ

反した。

「アヽヽ嘘にこんな苦しい暮しが、あんで六十年も續けて來られべえ……」農夫は畑に立つた儘、土に汚れた手で貌を掩ふて泣き出した。

此の事があつてから、子爵は數日間、一足も外に出でなかつた。そして何時までも、陰欝な、重苦しい氣分に閉されて居た。食事にも、讀書にも思索にも、執筆にも、夢の中にも、日光の中にも泥だらけの手で顔を掩ひながら、畑に立つて泣いてゐる老農夫の姿が見へた。――六十年の間、汝は俺と俺の家族のパンを奪つて肥へて來た。そして俺の馬が、汝の樺の芽を喰つたと云つて、汝は俺を盗人のやうに罵つた――子爵は室内の有ゆる器具が、自分の顔を睨み付けながら、一齊にこう叫んで責めるやうに思つた。

一日、子爵は久しぶりで杜に入つた。そして向ふともなく、老農夫に出會つた方へ小逕を辿つて行つた。杜の奥處は暗緑の層をなして、木の葉を透して泄れる薄青の日光は、細い榛の枝から垂れた小蛇の鱗を辷り、頰白の雛を裂く梟の氣疎い鳴き聲は、古い樅の梢から響いた。

俄然、只ならぬ物音が、默想に耽りつゝ歩むで居る子爵を驚かした。眼を上げて見ると、髮をおどろに亂した女が、一散に走つて行く。それが、暫らく走ると轉び、起き上つて走るかと思ふとまた轉ぶ。子爵は吃驚して、何か非常な事が起つたに違ひないと思つた。そして大聲に呼びながら跡を追ひかけたが、女は倒れても倒れても、起き上つては愈々烈しく走り續けた。到頭、女は手も足も血だらけにして、疲れ切つて地上に昏倒して了つた。

『如何したんだ、何が出たんだ。確かりしろ、オイ。』子爵はやつと追ひ付いて、息を切りながら問ふた。

『御免なさりまして、お慈悲でがんす、もう決してしねえでがす……。赤ん坊の湯ゥ、燃やすものが無えもんだで……』女は恐怖に體を顫はせて、顔を涙に濡らしながら、地面に平伏した儘詫び事をくり返した。

『如何したといふんだ、何をそんなに謝まつてるんだ。そんなに恐れる事は無い、氣を落着けて、如何したんだか話して見ろ。』子爵は女の態度に驚

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

きながら　言葉やさしく尋ねた。

此の百姓女は姙娠して居た。そして產月の苦痛を堪へて、嬰兒の產湯を沸す燃料を採りに來たのだが、地主の姿を認めたので、若し見付かればどんな目に會ふかも知れぬと思ひ、漸く集めた薪を打ち捨てゝ逃げ出したのであつた。先刻女が一散に走つたのを、只管何ものかに追はれでもした事と思ひ定めて、大聲で呼びながら追ひかけたのが却つて愈々女を恐怖させたと知つた時、子爵は心からお可笑がつて笑つたが、その頰には淚が止め度なく流れて居た。そしてその笑ひ聲も、やがて烈しい嗚咽に變つた。

——苦しんで居るのは一人ぢや無い、農民全體だ。馬は杜の若芽を喰ふが、餓えたその飼主は、畑に鍬をとらなければならぬ。その生るゝ子の爲めに、杜の薪を拾はなければならぬ。誰が彼等を此の窮乏と悲慘の谷底に陷れたのだ、祖先以來數百年間、彼等のパンを奪つて來た吾々だ。そして俺は何をして居る、無益な思索と瞑想！　他人の勞力に據る奢侈と逸樂！　凡て羞づべき罪惡一切の社會的迷妄と謬見の根源である。俺は既に第一の偶像を破壞した。いま第二の改宗が、荊ある鞭のやうに俺の良心を刺す。俺の科學的研究とは何だ、智識の開發とは何だ、何よりも第一に爲すべき事は、他人の勞力の掠奪を廢めるのだ。俺の有つて居る凡ての土地、凡ての財產を、昔から耕やしたり、拓いたりして、それを增やして來た眞實の所有者に返すのだ——子爵は狂氣のやうに絕叫した。そして暴風のやうに、別莊の方に對つて駈け出した。

野波十畝氏著『是乎非乎』の序

堺　利彦

…去年春、僕は久しぶりで大阪の地を踏んだ…… 遂に朝日新聞社に西村天囚君を訪問した。天囚君は僕の大阪時代の先輩であり、恩人である。……天囚君は程なく例の偉大なる體軀を見せた。……そして彼の豪放と快活と淳撲とをコキまぜた樣な、其の一種特別の懷かしき表情を以て、先づ破顏一笑して僕を迎へて吳れた。……然し今日の天囚君は、旣に其の政治上、倫理上の立場よりして、一個の友人後輩として僕に交を交す事が出來ないのであつた。道同じからざれば相共に計らず、私情を以て公義を紊すべからずといふのが、天囚君の態度であつた。……相共に計らずとも相共に酒を酌むに差支は無い、公義の火に私情を沒すべきに非ず位に、僕の方では思つて居るのだけれど、どうも仕方がない。…… 然るに……今此大阪の土地よりして、僕の序文を所望する著述家と出版者とが現はれた。嗚呼是れ何の兆ぞや、とでも云ひたくなる。

人と超人

バアナアド・ショウ作
堺利彦譯

此の劇中の人名の發音につき、二三の友人から親切な教を受けたので、今回はそれを折衷して少し改めて置く。

第一幕（つゞき）

オクテビアス　それは斯うです。實は私にも内々そんなお話がありましたけれど、私はアンを愛して居るのですから、其の役目は御辭退しました。私が後見人としてアンに臨むと云ふ、そんな權利はどうしても私にありません。それであの方がアンに其話をなさると、アンも私の考がいゝと云つたのです。ラムスデンさん、私は實際アンを愛して居ます。それはジャックも善く知つて居るのです。若しジャックに愛する婦人があつたら、私はどんなに其の婦人が嫌でも、ジャックの前でそれを青大將に喩へたりしやしません。（と、二つの塑像の間に腰かけて、壁の方に顔を向ける。）

ラムスデン　私にはどうもホワイトフイルドが正氣で此の遺言を作つたとは信じられない。君は今たしかに云ひましたね、彼は君の意見に從つて之を作つたのだと。

タナア　宜しい、そうすれば君は我輩の意見に對して大いに感謝すべき譯です。彼は君に二千五百磅の報酬を贈つて居る。そしてテビーには、妹の結婚資金と外に五千磅を贈つて居る。

オクテビアス（又更に涙を流して）僕はそんなものを貰ふ譯に行かない。是迄にモウ澤山世話になつて居るのだから。

タナア　心配にや及ばないよ君。ラムスデン君が此の遺言を無効にするんなら。

ラムスデン　ハハア、君は私を板挾みにしたのだな。

タナア　所が、彼は我輩に對しては、只アンの監督を任せたばかりで、何んにも呉れはしない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

我輩はモウ今で多過ぎるほど金を持つて居ると彼は云ふのだ。是で見ると、彼は正氣であつたに相違ない。ソウぢや無いですか。

ラムスデン（苦い顔をして）それは成程ソウだ。

オクテビアス（立ち上りて、其の壁の側の隠れ場より出で來り）ラムスデンさん、あなたはジャックの事を大變に惡く取つてお居でになるが、ジャックは立派な男です、そんな卑劣な――

タナア　オイ君、テビー、よして呉れ。僕ア立派な男でも何でも無い。此の通り現に不動の金縛りに會つて居るのだ。君は兎にかくモウ早く結婚して、僕の手からアンを取つて呉れ玉へ。僕は元來アンの手から君を救はうと思つて居たのだけれど！

オクテビアス　それぢや君は何だな、僕を最大の幸福から救はうとしたと云ふのだな。

タナア　ソワだよ、幸福の一生涯から救はうとしたのだ。若しそれが最初半時間の幸福と云ふのならテビー、僕は身代限をしても君にそれを買つてやるよ。然し一生涯のべつ幕なしの幸福と爲つちやヤリきれない！。全く此世の地獄だね。

ラムスデン（勃然として）お默りなさい。そんな馬鹿口は餘所に行つて叩いて貰ひたい。私は聞く耳を持たん。（床を蹴ちらしてテーブルの方に歩みより、元の席に着く。）

タナア　ソーラ見たまへテビー！　先生の頭の中にや十八世紀以後の思想は一點もありやしないアンの後見人にや本統に以て來いだ。

ラムスデン　君の樣な人物から輕蔑せられるのは私の名譽だ。君の思想は即ち此本に現はしてあるのだらうな。

タナア（熱心にテーブルの側に寄り）オ！　僕の本が！是を君ドウ思ひます？。

タナア　ぢやナゼ買つたんです。

ラムスデン　私がこんな本を讀むと思ふかな。

ラムスデン　買ひはしません。或る馬鹿な婦人が、矢張り君の崇拜者だと見えて、送つてよこした。それで今丁度棄てようと思つて居た所にオクテビアスが來たのだ。失禮だが、今君の眼の前で棄てる。（と本を取つて屑籠に放り込む。其の勢ひが餘り烈しかつたので、タナアは自分の頭に放りつけられるかと思つて、ビクリとする。）

タナア　君も我輩と同じに隨分無作法ですね。然しお蔭で大きに手間が省ける。（再び椅子に掛ける。）所で此の遺言は一體どうします。

オクテビアス　私が差出口ですけれど――

ラムスデン　イヤ何に遠慮は無いよ。

オクテビアス　此事に就いて、何か又アン自身の望みもあらうかと思ひますが――

ラムスデン　勿論そりや本人の望みも何處までか聞いてやるが宜しい。けれど何分女の事だからな、殊に經驗の無い若い娘の事だからな。

タナア　ラムスデン君、君は實におめでたい。

ラムスデン（カツトして）　餘計な世話を燒いて貰ふには及ばん。

タナア　アンは是が非でも自分の思ふ通りの事をやります。そしてまだ其上に、其の通りの事をしろと我々の口から勸めさせるのです。そして若しか其事が出來そこなふと、皆んな其罪を我々に被せて了ふのです。ですがマア、テビーもアンを見たがつて居ますから――

オクテビアス（はにかみて）　僕は何もそんな――

タナア　嘘を云ふなよテビー。見たい癖に。そこで兎にかくアンを二階から呼んで、其の思はくを聞く事にしやう。サア、テビー、早く行つてアンを連れて來て呉れ玉へ。（テビー行きにかゝる。）早く頼むよ。僕とラムスデン君と二人斯うして睨み合つて居るのは少々辛いからな。（ラムスデン唇をキュッと引締めたが、何んにも云はずに默つて居る。）

オクテビアス　ラムスデンさん、どうぞジャックの事を氣になさらないで。あれは冗談ばかり云ふのですから。（出で行く。）

ラムスデン（つくづくと考へながら）タナア君、君の樣な鐵面皮な人を私は見た事が無い。

タナア（まじめにて）　御尤も。然し其の僕でも矢張り少し恥かしさの拔けない所がある。今の世の中には恥かしいと云ふ空氣が充ち滿ちて居る。何でもあれ眞實在の儘の事は皆恥かしいとなつて居る。第一我身を恥かしがる、親戚を恥かしがる、收入を恥しがる、言葉癖を恥かしがる、我が意見を恥かしがる、我が經驗を恥かしがる。丁度それは人前で裸になるのを恥かしがると同じ譯です。ねえラムスデン君、ソウでせう、我々は歩く事を恥かしがる、乘合馬車に乘る事を恥かしがる、自分

で馬車を持たずに貸馬車を借る事を恥かしがる、二頭立の馬車を持たずに一頭立の馬車を持つ事を恥かしがる、召使の男女を大勢持たずに只一人の女中を持つ事を恥かしがる。何んでも餘計に物事を恥かしがるだけ、餘計に其人が上品な譯になつて居る。現に君は我輩の本を買ふ事を恥とした、又それを讀む事を恥とした。只君が恥としないのは讀みもせずに其本を許する事だけだ。而もそれだつて矢張り、異端邪説を抱く事を耻とするに過ぎない。然るに我輩は天性此の耻と云ふ賜物を受けて居ないので、それで人が驚くのだ。我輩と雖も人の持つだけの美德は持つて居る、只——

ラムスデン　そう思て居れば如何にも結構だ。

タナア　と君の云ふのは、自分の美德を自分で吹聴するのは恥づべき事だと云ふ意味でせう。眞逆我輩に美德が無いと云ふ意味ではあるまい。我輩が君と同じくマジメな正直な一市民である事は分りきつて居るだらう。個人間に於いても、ソウであるし、更に政治上及び公德上に於いては一層多くソウである。

ラムスデン（問案の出來ぬ論點に及んで來たので）　イヤそうで無い。君であらうと、誰であらうと、凡そ此の私を以て世間普通の俗人と見做す事は斷じて許さない。私は世間の偏見を賤む。私は世間の固陋を嘲る。私には一個獨立の意見がある。君は新思想家を以て任じて居るらしいが、私は君の生れない前からの新思想家であるのだ。

タナア　成程、昔はソウでしたらう。

ラムスデン　昔でも今でも同じ事だ。私が新思想の旗を卷いた證據が何處に在る。私は今日では昔よりも一層進歩主義になつて居る。私は日々に進歩して居る。

タナア　成程、年齢だけは日々に進歩するでせうよ。ねえポロニアス君。

（註。ポロニアスとは、シエキスピア劇のハムレットの中に出て來る人物で、ハムレットが形式を侮蔑する熱狂の天才であるに對し、ポロニアスは其父の侍從として、昔の賢人、昔の識者、而して今は少々時代後れと云ふ地位に立つて居る。）

ラムスデン　ポロニアス！。それぢや君はハムレットなのか。

タナア　違ふ。我輩は只君の謂ゆる鐵面皮な人物なのだ。鐵面皮と云へば、モウ此上もない惡黨の様に君は思ふだらうが、然し苟くも人に向つて

惡言を放つ以上は、君も立派な男だ、實際我輩の何處が惡いか、それを少し自分で考へて見るがいゝ。泥棒、うそつき、詐欺、姦淫、暴食、暴飮、凡そ是等の惡名の中、一つとして我輩の上に下し得る者があるか。結局、君は只、我輩が恥を知らぬと云ふのを責めるだらう。宜しい、それは我輩も承認する。イヤ、寧ろ自らそれを祝する。我輩が若し此の我輩の在の儘を恥づるとしたら、それこそ矢張り世間の奴等と同じ樣に好い馬鹿になるのだ。ラムスデン君、君もチト鐵面皮になり玉へよ。そうすりや直ぐに顯著な人物になれるんだ。

ラムスデン　私は何もそんな——

タナア　何もそんな名聞など求める氣は無いと云ふのだらう。其の返事は聞かない先からチャンと我輩に分つて居る。あの自動器械の穴から一錢ほりこめば、必ずマッチが一箱轉げ出るのと同じ譯だ。どうだ君、君はモウ此上一語を發する事をも耻づるであらう。

之に對してラムスデンは將に一大喝を發せんとする意氣込に見えて居たが、丁度そこにオクテビアスがアン・ホワイトフイルド孃と其母とを伴うて入つて來たので、ラムスデンは急いで立ち上り、戸の側まで出迎へた。アンの器量が好いか否かと云ふ事は見る人の趣味に依つて異なる。又見る人の年齢と男女とに依つて異なる。オクテビアスに取つては、アンは實に魔力のある美人で、此人の前に居る時は世界が丸で變つて了つて、些々たる個人的意識などは消滅して、頓に人類としての無限永久の生活に入り、遙かに其の東國に於ける自己の發源地に遡り、或は更に自己の落ち來りしと云ふ天國に遡つて、其の神秘なる記憶をたどる事となる。彼に取つては アンは洵に空想華想の實現(Reality of Romance)である、妄念の底に存する正念(Inner good sense of nonsense')である、我が眼を開く者である、我が精神を解き放つ者である、時間と場所と境遇とを取り去る者である、彼れの血液を醇化して生命の眞水の流るゝ歡喜の河と爲す者である、有らゆる神秘の示現であり、有らゆる敎法の聖化(Sanctification of all the dogmas')である。然るにアンの母に取つては、よほど遠慮して云つた所で、アンは迚もそんな譯の者ではない。と云つて、何もオクテビアスの歸依尊崇が滑稽だとか不見識だとか云ふのではない。アンは實に立派な人である。品が善くて、姿が善くて、如何にも貴婦人らしくて、そして人を卷きこむ樣な眼と髮とを持つて居る。それに母親が眞黑の喪服を着て人の眼ざはりと成るに似ず、アンは其の亡父に敬意を表せんが爲、黑と紫の絹で新案の喪服を作つて居る是はラムスデンが御自慢の、俗習に頓着せぬ進歩主義の家風を示すものである。(横文を挿入したる個處は譯語の怪しき事を示す)

然し是だけでは、アンの魔力の説明として要點を外れて居る。彼れの鼻を上に向かしめ、彼れの眼を藪にらみと爲し、其の黑ゝ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

紫との喪服の代りに花賣娘の前掛と帽子とを着せても、アンは猶男の心を動かすに相違ない、活力は人情と同じく誰にも存して居るが、時としては、矢張り人情と同じく、其の天才を生ずる。アンは即ち活力生氣の天才である。但し誤解し玉ふな、是は多情多慾の人と云ふ意味ではない。多情は活力の出來損ひであつて、眞の充實では無い。アンは十分愼みあり、十分節制ある婦人である。又その通りに見えて居る。只其樣子は當世風の、如何にも無邪氣で、卒直である。そして自分の厭と思ふ事は決してせぬ人物だと云ふ事が確かに見えて居る。恐らく、それよりも更に一歩を進めて、自分のしたいと思ふ事は、他人なんぞに滅多に遠慮もせず、ズン／＼やつてのけると云ふタチである。要するに、アンは弱い婦人連から『猫』と呼ばれ、意地惡と呼ばれる女である。

扨アンの入來と、ラムスデンの出迎と、其ラムスデンにキスするアンの樣子とは、何とも云はれぬほどシホらしい趣きである。若し地下のホワイトフィルド氏が、今此の男等の笑止な顔と（タナアは別物で、獨りセカ／＼して居るが）、其の無言のまゝで握手するのと、其の痛はりながら椅子を勸めるのと、未亡人の鼻を啜るのと、娘の眼を赤くして物も云へぬと云ふ樣で居るのとを見たならば、嘸滿足して堪へがたい程に思ふであらう。ラムスデンとオクテビアスとは壁の側にあつた二つの椅子を取つて、二人の婦人に勸めたが、アンはタナアの側に寄つて、タナアが荒つぽく突出した其の椅子に腰かけた。そしてタナアはヤレ／＼と云つた樣な風で、態と無作法にテーブルの片隅の椅子に腰かける。オクテビアスはアンの次にホワイトフィルド夫人を腰かけさせ、自分はラムスデンがスペンサアの肖像の鼻の下に置いた空椅子に腰かける。

ホワイトフィルド夫人は小さな女で、其のすがれた薄色の髮は玉子の上の藁の樣に見えて居る。總てが矜持といふ風で、折にはガミ／＼と爭ふ樣な所があつて、何だか急に斯う、大きな人から片隅に押し寄せられるのを、絕えず掻き分けて前に出ようとする樣な樣子がある。人に輕く見られ、馬鹿にせられて居る事に氣が付いて居ながら、進んで人前に力量を示すだけの氣力もないが、さりとて默つて其の運命に服從するでも無い。オクテビアスはアンに全心を取られて居ながら、それでも猶勉めて殊勝げに夫人の方に氣をつけて居る。

ラムスデンは嚴然として、テーブルの前なる我が元の座席に着き、タナアには眼も呉れず、直ぐに用談に取かゝる。

ラムスデン　アネーや、今此のお互ひ愁傷の折柄、お前にこんな話をするのは氣の毒だけれど、然しお前のお父さんの遺言の事で困つた問題が起つて居るのだ。お前はあれを讀んだらうな？。（アンは輕く頷づいて、チヨツト返事の眞似の樣な息づかひをした。）私は全たく驚いたよ、タナア氏と私とが連帶でお前とロダの後見役に名ざされて居るのには。（暫く止まる。一座白けわたつたが、別に言葉も出ぬ。ラムスデンは誰からも返事の無いのに少し氣を惡くしながら言葉を續ける。）私はどうもそんな風にして此役を引受ける譯に行かない。タナア氏にも何やら異議があるさうだが、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

其の理由は私は知らない。勿論それは本人からお話があるだらう。所で兎にかく是に就いては、一つお前の意見を聞かなくては、我々は何を決する事も出來ない。それでツマリ斯う云ふ事になるだらうと思ふがな、お前は私一人を後見役にするか、それともタナア氏一人にするか、どちらか一人を撰ばなくちやなるまい。何分、二人連帶でやると云ふ事は迚も出來まいと私は思ふがな。

アン（小聲にてサモ柔しく） お母さんが――

ホワイトフイルド夫人（急いで） コレ、アンや、私（わたし）に塗りつけるの厭ですよ。私にや其事に就て意見なんぞありません。よしやあつたにした所で、私の云ふ事など聞いて貰へや仕ません。お三人で何となりと然るべくお極め下されば、私は何んにも申する事はありません。

（タナアは頭を此方に向けてラムスデンの顔をジツト見る。ラムスデンはムツトして其の無言の通信を受けつけぬ。）

アン（は矢張り其の柔しき聲にて、母の不機嫌に頓着せず） お母さんは女の事ですし、いづれ誰方かに氣をつけて戴かなくちや、私やロダの世話を一人で引受けて下さる譯に行きやしません。ロダには勿論後見が必要ですし、私だつても、まだ若い娘の身で自分獨りで何でも極める譯に行きやしません。ねえおヂイさん、さうでせう?。

タナア（ビツクリして） おヂイさん！ あなたは後見人の事をおヂイさんと呼ぶのか?。

アン 馬鹿おつしやいよ。ラムスデンさんは昔から私のおヂイさんなんだもの。私はおヂイさんのアネーで、あちらはアネーのおヂイさんなの。私は赤ん坊の時から此の方にれヂイさんと名を付けて了つたの。

ラムスデン（冷かす樣に） それでモウ分つたでせう、タナア君。さあアネーや、それからどうだ。

アン それでですね、私に後見人が入用だとすれば、お父さんの折角名ざして下すつた方を、どうして私に斷つたりする事が出來ませう。

ラムスデン（唇を嚙み） それではお父さんの極めた通りが可いと云ふのだな?。

アン 私は可いの惡いのと云ふべき身分ぢやありませんもの。私は唯從ふのです。お父さんは私を愛して下すつたんですから、其の云ふ通りにすれば私の爲になるんでせう。

ラムスデン ウム、そりやお前の心持は善く分つて居る。如何にもそうありそうな事だ。それが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

お前の善い所だ。然しなアネーや、それだけではまだトント此の問題の解決が付かない。マア茲に一つ例を擧げて見るが、假に斯う云ふ事があつたらドウする。私が何か破廉耻な事を仕た人間でツマリ私が、あのお人よしのお前のお父さんの思つた樣な人物で無いと云ふ事が分つたら、それでもお前は何か、矢張り私をロダの後見にするのが當然だと云ふのかい。

アン　だつておヂイさん、私にやアナタが破廉耻な事をするなんて考へられませんもの。

タナア(ラムスデンに向ひ)　君にそんな行ひがありましたか?。

ラムスデン(勃然として)　ありません。

ホワイトフィルド夫人(おとなしやかに)　それぢやナゼ又假にらそんな事を仰つたのです?。

アン　それ御覽なさい、おヂイさん。お母さんは假にもそんなこと私に考へさせたく無いのですよ。

ラムスデン(大いに當惑して)　あなた方は二人とも餘りに正直で人が好いので、どうも此の事件の關係はハツキリと呑込ませる事が六かしくて困る。

タナア　ラムスデン君、君がハツキリと云はないから、それで猶分らないのだ。

ラムスデン(ムッとして)　それでは君が云がいゝ。

タナア　宜しい、云はう。詰り斯うなんだよ、アン。ラムスデン君は僕があなたの後見人に不適當だと云ふのだ。そしてそれには僕も全く同意だ。ラムスデン君の考に依れば、あなたのお父さんが若しか僕の本を讀んだら、決して後見人に指定はしなかつたらうと云ふのだ。サツキの破廉恥云々は即ち僕の本の事なんだ。そこでアナタはラムスデン君一人に後見をして貰ふ事にして、僕を辭任させるのが、ロダに對する義務だと云ふのだ。だから早くソウおつしやい、僕は辭任するから。

アン　だつてジヤツク、私まだあなたの本讀まないんだもの。

タナア(反古籠の中を探して彼の本を取出し)　それぢやサア早く讀んでお極めなさい。

ラムスデン(猛然として)　アネー、私がお前の後見人になるのならば、其の樣な本を讀む事は斷然禁止する。(拳でテーブルを叩いて立ち上る)

アン　あなたがイケナイと仰りや、無論私讀み

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

やしませんわ。（と、本をテーブルの上に置く。）

タナア　一方の後見人が一方の後見人の本を讀む事を禁ずるとすれば、迚も收まりの付き樣が無い。若し僕が今それを讀めと命じたら、あなたの僕に對する義務は一體どうなる。

アン（おとなしく）　だつて、あなたは眞逆わざとそんな事をして私を板挾みにしやしますまい。

ラムスデン（いら〳〵して）　よし〳〵アネー。そりや尤もだ。お前に無理は無い。だけど、どうも仕方が無い、矢張どちらかに極めなくちや。板挾みはお前ばかりぢやない、私等もそれなのだから。

アン　でも私。まだ小供だし、何んにも知らないし、そんなこと私に極められないわ。私に取つちやお父さんの言付は神聖なんだもの。

ホワイトフィルド夫人　あなた方お二人で極められない事を、アン一人に極めろと仰るのは、そりや少し無理で御座いますよ。私にや何だか斯う、世の中の人が皆責任を外の人に被せかけて居る樣に見えますが。

ラムスデン　そんな風に考へて下すつては困りますが――

アン（なつこらしく）　ぢやおヂイさん、あなた私の後見して下さることイヤ？。

ラムスデン　イヤだなんてそんな事があるものか。只タナア氏と一緒にするのが困ると云ふのさ。只それだけさ。

ホワイトフィルド夫人　なぜ又そんなにジヤツクがいけないんでせう。

タナア　僕の思想がラムスデン君以上に進歩して居るからです。

ラムスデン（サモさげすむ樣に）　そんな事は決して無い。

アン　そりやソウに極つてるわ。おヂイさん以上に進歩した人があるもんですか。是はキツト何でせう、ジヤツクが色々無理なこと云つたのでせう。ねえジヤツク、もうどうかそんなこと云はないで、私の後見になつて頂戴よ。イヤ？。

タナア（愁然として）　宜しい。元々僕が仕でかした事だ。引受けるより外はあるまい。（と、本箱の方に向きてそこに立ち、不機嫌らしく本の表題を見て居る。）

アン（嬉しくて堪らぬと云ふ樣子を抑へて立ち上り）　サアもう話は極つちやつた。是でお父さんの遺言どほりに成るのだから、私もお母さんもこんな嬉しい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

事はないわ。（と、ラムスデンの側に寄り、其の兩手を握りしめて）おヂイさんには色々世話して貰つたり、云つて聞かせて貰つたりするし、（肩ごしにタナアの方をチラリと見やりて）それにあのジャックのジャイアント・キラアは居るし、（母の前を通つてオクテビアスの側に寄り）それにジャックの仲好しのリキ・チキ・テビーは居るし。（オクテビアスは恥かしそうな間の抜けた顏をする。）

（註。ジャックのジャイアント・キラアとは、桃太郎の鬼が嶋征伐と云つた様な言葉で、こゝは昔話にかたどつて仇名を付けたものと承知あれ。リキ・チキ・テビーには別に意味といふ程の事はあるまい。テビーは云ふ迄もなくオクテビアスの略稱。）

ホワイトフィルド夫人（立ち上りて其未亡人服を引きつくろひながら）、ラムスデンさん、モウあなたもいよいよアンの後見人におなりですから、どうかアンにそう仰つて下さいまし、今の様に無暗と人に仇名を付けますあの癖を直す様に。誰だつてあんなに云はれるのは厭でせうから。（と、戸の方に歩みよる）

アン　アラ！　お母さんドウして？。（甘えた様な、ビックリした様な振で）ほんとにソウか知ら！。私ちつとも氣が付かなかつたわ。（と、オクテビアスの方に向く。オクテビアスは後ろ向に椅子に跨がり、兩臂を椅子のモタレに載せて居る。アンは彼れの顋に手を當てゝ急に其の顏を上に向かせ）あなた大人の様にして貰ひたくッて？。私是からあなたのことロビンソンさんッて呼ぶんですか。

オクテビアス（まじめに）いゝえ矢ッ張りどうかリキ・チキ・テビーと云つて下さいよ。ロビンソンさんなんて僕イヤになつちまふ。（アンは笑ひだして、指の先でオクテビアスの頰を突ッつき、今度はラムスデンの方に戻り）あのう、あなたのことおヂイさんなんて云つちや餘んまり失禮ですわねえ。私ちつとも氣が付かなかつたけど。

ラムスデン（サモかはゆげにアンの脊を叩き、柔しき聲にて）馬鹿な事を云ひなさんな、アネーや。おヂイさんに限るぢや無いか。お前がおヂイさんと呼んで呉れなきや、私はモウ返事をしないと極めた。

アン（嬉しげに）有がたうよ、丈そう云つて下さるから。ジャックだけがイケないのね。

タナア（本箱の前より肩ごしにチヨト振向きて）僕の事はタナアさんと呼んで下さい。

アン（おとなしく）いけませんよ、ジャック。態とそんなこと云つて人に逆らふのはアナタの癖だから、知つてる者は何とも言やしないわ。それよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

りか私あなたのこと、御先祖の名のドン・ジュアンにして上げようか知ら。い丶こと?。

（註。ドン・ジュアンは昔物語に有名な人物で、一面には業平とか光氏とか云ふ様な意味があり、一面には放膽なる自由思想家と云ふ様な意味がある。此劇の序文の中に、ショウはイプセンの「人形の家」のノラの事を、女性のドン・ジュアンと云つて居る。猶このドン・ジュアンの話は此劇に深い關係があるけれど其事は又後に記す。）

ラムスデン　ドン・ジュアン！。

アン（無邪氣に）　いけないんですか。私知らなかつた。おや、そんな名を付けるの止しませうね。そして何かモット外の好い名を考へつくまで矢張りジャックにして置くわ。

タナア　モット外の惡い名なんか考へつかれちや閉口だ。僕は降參する。ジャックで可い。ジャックで結構だ。あ丶〳〵是でモウ僕の言分は劈頭から通らない事になつちまつた。

アン　ソーラねえ。お母さん、皆んな本統は仇名が好なんですよ。

ホワイトフィルド夫人　それにしてもさ、せめて喪中だけでも止しておくれな。

アン（急にギクリとした體にて、母親を責める。）　お母さん、又私に思ひださせる！。（悲しさの餘り席に堪へず、急に室を出で去る。）

ホワイトフィルド夫人　おうソウだつたッけね。又私が惡いんだね！。（アンについて出で去る。）

タナア（本箱の方より此方に來り）　ラムスデン君、我々もあのお母さんと同じく見事にヤラれたんだ、メチャ〳〵にやられたんだ、スッカリ馬鹿に仕られたんた。

ラムスデン　何をツマラン事を！。（ホワイトフィルド夫人の跡を追うて室を出で去る。）（第一幕未完）

■自由劇場（小山内薫 市川左團次 共編）

自由劇場の舞臺監督法だとか、その俳優の演出法だとかいふものに就ては、世間にいろ〳〵な批評もあらう。然し何人も、尠くとも過去に於ける自由劇場の日本の劇界に貢献して來た功績は否むまいと思ふ。即ち西洋の近代劇を上場した事、殊にそれが純粋の舊派の俳優に依て演ぜられた事、文壇及び劇界に於ける新しい劇の一運動を形作つた事等である。そして今や同劇場の中心をなして居る市川左團次氏と、小山内薫氏との共編に成る、同劇場のレコードとも云ふべき本書が出版された。眞實の意味に於ける新らしい劇の流行を極めて居る今日、此の運動の先驅をなした仝劇場の歴史の一般に通じて置くも徒爾ではあるまい。（二七五頁定價金六十錢本郷區森川町一番地郁文堂書店發行）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

一月の小説

寒

■つぶやき(町野秋人)　親父が「盗むのと與へるのとドッチが善い」と聞くと、息子は「ドッチか解らぬ、教育を受けたから解らなくなつたのだ」と云ふ。息子が「他處で御馳走になつたが拙かつた」といふ、親父が「その志を喰べなくてはイカヌ」といふと「そんな海月見たいなものは厭だ」といふ。そういふ内容だ、如何ですチョイと皮肉でせう、何しろツルゲネフの「父と子」なんざ、もう舊いサ。(黒耀)

■處女作(江馬修)　神田區役所の二階で今日いよ〳〵臨時傭を解かれるといふ連中が十二三人、俸給を受け取る迄の時間を、飛行機の話しをしたり、女の話しをしたり、酒が飲みたいと云つたり、中にはまた、今後の身のふり方を談り合つたりしながら消して居る。拘留中の淫賣婦と關係して免職になつた巡査の古手、醫者志望の苦學生、商業に失敗して舞ひ込んで來た者、それ等の人々の間に美知三も混つて、今日限り別れて行く同僚の身の上を想ひ廻らした。斷り書には三年前の處女作にかゝるものだとしてあるが、失業に馴れて零落した人々の只だ給料を望む投げやりな心、世馴れぬ青年の、生活に苦しむ心など、胸に迫る作である。(スバル)

■小さき影(相馬泰三)　彼の許に轉がり込んで來て、一つ室に同宿して居た友人の湯本は、フトある機會から地方の物持で、有力な新聞社の社長をして居る老人と知己になつた。そして非常に老人に氣に入られて田舍の其家へ引き取られて行つて了つた。彼はその後も相變らず、勤めて居る雜誌社に通つて居たが、仕事も、生活も、世の中も、人と人との關係も、一切の事が凡て間違つて不正に見へて仕方がなかつた。彼の腦は漸々變になつた、或る夜いつ迄もいつ迄も歩き續けて居る中に、大きな河の畔に出た。彼は憤懣と激怒との絶頂に達して、突然素裸になつて衣類を河中に、投げ入れた、そして、自分も續いて飛び込んだ。此の作者がよく取扱ふ、青年の病的な心理の描寫であるが、猶その中にも、不平等な社會と不正當な生活とに對する盲目な憤怒、無智な反抗が窺はれる。そして又、爲すべき仕事の無い窮屈から來た、ブルジョアシーの青年の煩悶などゝいふものの描寫に較べて此の作が遙かに力と新味に富んで居る所以だ。(奇蹟)

■愛の郷へ(荒木郁)　戀し合つて居る男と一緒に温泉に行つたが、只だ窮屈な苦しい數日間を送つたに過ぎないで、知らぬ事は矢張り知らぬ儘で歸つて來た。その晩、紳士らしい態度と慈母のやうな愛をもつて居る、常に尊敬して居る男から「凡ての事を知らうとする、慾望の多い、發育盛りの」女は、遂にその知らずして歸つた事を教へられた。女はその男と結婚して、戀人とはそれ限り會はなかつたが、やがてその男は死んだ。そして女も初めて眼がさめて、自殺して昔の愛の領土に歸る、一人稱で女から良人に與へる遺書になつて居る。面白いとは思ふが、死んだ戀人の跡を追ふて、自分も自殺するといふのが蛇足じやあるまいか。(青鞜)

■針箱と小説(長與善郎)　此の作の中に現はれる坂井といふのは武者小路で、精子といふのは「世間知らず」の中の謂ゆるＣ子だらう、と云ふやうな、凡て白樺の人　些しでもアテのつく位の智識？をもつて居る者にでなければ、此の可なり長い小説もそう大して面白いものではない。然し、單に事

實の興味で讀者を釣るといふ事は、卑怯な事だといふのは勿論の話である。さすれば不幸にして此の作は、只だ白樺同人の關係が解つて面白いと云ふ外、藝術的に大した價値のあるものでは無いやうだ。(白樺)

■遊女(田村とし子)　田村とし子――遊女、勿論自分で附けた題だらうがチヨツと皮肉だ。――この女作者の頭腦の中は――といふ冒頭を讀んだ時、――カラッポでーーといふ文句が自然に頭に浮んだが、讀んで行くと成る程正直にそう書いてある。暮に押し迫つて賴まれ物の小説が書けない、腹を立て、亭主をコヅヤ廻す、ヒキズリ倒す、掻きムシる。それでも書けなかつたといふだけのもの。亭主(可哀そうに松魚氏だらう)の小人と、自分には小説を書く技倆が無い事を廣告して、ケチな小ボケな主觀を露出しにしたより外に取り所は無い。(新潮)

■彷徨(青木健作)　臺灣に行くつもりで家を抜け出して、汽車で下の關に着いた時お辰とお冬は巡査に告められた。そして警察へ連れて行かれた後、再び實家に送り歸される事となつた。二人は如何しても家へ歸る氣にはなれないので、河へ飛び込んで死なうと決心した。然し死ぬ決心も着き兼ねて、二人はまた峠を越えて逃げた。二人はそれから渡し舟に乘つて、綱を傳つて向ふ岸に着かうとする中、疲れ切つたお辰は覺えず手を放した。舟は昏憊した二人を乘せた儘、暗黑な夜の河を流れて行つた。無智な田舍娘の感情が、可なりよく現はれた長篇である。(新小説)

■戲作者の死(永井荷風)　偐紫田舍源氏を書いたゝめに、千代田の大奥の秘事を發いたといふので、幕府からお咎めを蒙つた柳亭種彦を題材に採つた未完の長篇小説である。屋根船で大川を下つて涼みながら、弟子や、畫工や、版元等が、陽氣に浮れ騷いで居るのを眺めつゝ、墮落し、廢頹し、爛熟せる世道人心を想ふて、深い暗愁に心を捉はるゝ老作者の心理が、荷風氏一流の水際立つた筆致で描かれて居る。佳作だ。(三田文學)

■心中未遂(正宗白鳥)　白鳥氏の作としては多少異つた味のある作かも知れぬが、これ程の材料を取扱つて居るにも拘はらず、その内容を通じて一向深い社會的智識を見出す事も出來れば、心理的觀察をも窺ひ得ないのを惜む。凡作だ。(中央公論)

■寄　贈■

白樺　新公論　内外教育評論　帝國文學　モザイク　新佛教　人物　スバル　テラコツタ　文藝講壇　青鞜　青年文壇

實業之世界　婦人評論　黑耀　奇蹟　新潮　東京魁新聞　郊外新報　東北　ニコ〳〵　村落通信　劇と詩

■二月號目次■

生の試み(感想)……アナトル・フランス
社會進化論(評論)……荒畑寒村
近代佛文學一面觀(評論)……大杉榮
アンドレエフの恐怖(評論)山本飼山
ショウ家婦所得稅論(紹介)安成貞雄
思索人(感想)……大杉榮
深夜の瞑想(感想)……荒畑寒村
太陽の光線(短歌)……若山牧水
You Never Can Tell.(詩)土岐哀果
美はしきエレン(詩)……佐藤緑葉
藍色の眼(小説)……安成二郎
人と超人(脚本)……堺利彦

大久保より

寒

■一月四日夜。近代思想社の第一回小集を鎧橋際のメーゾン鴻の巣に開いた。お客さまは本誌寄稿家十三名、外に馬場孤蝶、生田長江の二氏をも招待した。主人側の意、蓋し此のシンミりせる小集會に依て、吾々平生の抱懐を文壇の人に對つて吐露し、又文壇の人々の思想感情をも聞かうとするにあつた。

■處が人がまだすつかり揃はぬ中から、土岐哀果、安成貞雄、和氣律、伊庭孝の面々旣に論戰の火蓋を切つて賢問愚答、愚問賢答、濛々たる煙草の煙と共に狹い室に一杯になる。宴に移つてからは、五色の酒ならぬ麥酒に醉つた安成貞雄、對角線に据へた食卓の一隅に陣取つて「有髯の人種はまた優等の人種だ、彼のフランク人がアッシリアを經てフランスに入つた時……」なんて云ふかと思ふと、「接吻は人類の祖先が、類人猿の一種から進化し來つた際に起つた習慣である、ダーキン氏の「オリヂン・オブ・キッス」に據れば……」だの、「マルクスの「エコノミツク、インタプレテーション、オブ・キッス」に曰く……」だのと云ひだす和氣律これに反對して「然らば印度文明はその影響を受けて居るべき筈なのに、佛敎傳來當時の日本の文學に、毫もその形跡を認めないと云ふのは……」などゝ、是れ又旺んに氣焰を上げ、そして最後に、「接吻の起原は有史以前に非ずして、實に鎌倉時代に在る。」なんて云ふ珍妙な結論に到達するそうかと思ふと「月夜に釜を拔く」「亭主の好な赤烏帽子」なんていふ、イロハ歐留多の講義を始める必要が生じて來たりするので、馬場氏、生田氏、何れも腹を抱へて笑倒する。上司小劍氏は「是あ面白い、僕は會費をもつて每月來る」と、悉皆お氣に召して了つた。

■その中に餘興とあつて、和氣がお得意の淸元の「明烏」を一くさり、馬場氏の「丁度この位だらうと思つてた位の巧さだつた」といふ講評がある。最後に是をこの儘芝居にしたら、嘸面白からうといふ動議が出て滿場異議なく可決。十一時過に散會して、一同茅場町の停留場まで來たが、和氣と僕と蕎麥を喰つて居る中に。大杉の外皆な先へ行つて了つた。和氣、線路の上に立つて「アヽ、皆な行つて了つた」と呟やく。赤電車闇の中から漸々迫つて來る、靜かに暮――。

■鴻の巣の集會の翌夜、僕は大坂に赴むいた。仝行安成貞雄、和氣律の二人。二等室に陣どつて旺んに氣焰を吐く筈だつたが、何しろ安成も和氣も聊か吐きくたびれの體なので、初めの間は甚だ神妙だつたが、食堂に飛び込んで一杯ヒツかけると、和氣律途中で降ると云ひ出して肯き入れない。そして嬰兒を擁えた妻君に頻りに話しかけるので、妻君迷惑そうに相手になつて居たがその中にコソ〳〵立つて御亭殿と席を替へて了つたので、和氣の憤慨一方ならず、ブツブツ云ひながら寢込んで了つた。安成は京都で下車、和氣と僕とは大阪に下りてすぐに別れ、僕は獨り大逆事件で無期徒刑に處せられ、長崎の諫早監獄に入獄中の仝志の遺族を見舞つた。武田九平君の妻君は「前に東京へ行きたがつたのを止めましたら、赤旗事件が起りましたので、マアマア行かないでよかつたと云つて居ましたが、今度はまたこういふことになりましたので、あの時やつて置けばよかつたと熟々思ひます。」などと、染々物語られた、

■翌日僕は神戸に赴き夢野村の小松春子さんを訪れた。小松君が諫早に入獄してから

は、その遺して行つた養鷄事業は、纖弱い眷子さんの手一つで經營されて居るのである。『岡林は獄中で發狂したそうです。小松にはそんな事がしらせたくないと思ひまして、こうして仕事を續けては居りますが、却々エラうムいまして……』と、眼に涙を溜めながら話された時には、僕は覺へず胸が迫つた。犧牲！　あゝ大なる犧牲！　いつその涙の微笑と代るべき時は來るのか。再び大阪に引つ返して、夜は舊同志數名と會し、談笑歡語に夜の更くるを忘れた。

■僕は十日の朝歸京したが、和氣は十四日奈良から繪葉書をよこして、『歸京の途中一寸こゝへ寄つた。奈良では嫩草山と二月堂とが最もいい。』と云つて來た。安成は十六日の夜名古屋から『數時間に亘る搜索の後、人妻として彼女を發見した。今夕悄々として金城を去らんとす。』(但し、キッスだけはした)と云ふ端書をよこした。

■十二日の正午から、堺、大杉と三人して横濱の同志の新年會に赴むいた。舊曙會の村越老人獨りで氣焰を吐いて、『中は天下の正道なり、即ち長唄と一致する。それだのにアーメン、アーメン、なんて云ふから、つい癪に障つて常盤津の一つも呻りたくなる。』と、中庸と長唄の關係を評して、ヤソ教攻擊に移り、再轉して常盤津を唄ひ出して了ふ。憾むらくは四日の晩に、老人を招待しなかつた事やゞ。

■歸りには三人で折を二つブラ下げて、(大杉はすつかり喰つて了つて無い)神奈川の京濱電車發着所まで來ると、コーヒーでも飲うとあつて、前のレストランに飛び込む。すると女中が四五人集まつて來て、折を開けさせやうとする。堺が面白がつて二つとも開けて了ひ、キャツキャツ騷ぐ女共を捉まへては、中の料理を無理に喰はそうとする。女共は『厭ですヨ、厭ですよ』なんかと云ひながら、パクパク喰ふ。小半時も騷いだ後で見ると、二つの折は殆んど平らげられてあつた。堺は『あんなに甘そうに物を食つたのを始めて見た』と云つたが、蓋しマツタクだつた。

■處で、僕も一つ有邪氣なイタヅラをやつた。オヤヂの家をからかつてやれと思つていつも電話を借りる貸座數へ、件のレストラントから電話をかけると、月池亭には電話が引けましたといふ。豪い景氣だと思つてかけると、お春といふ女中が出て來た。『モシモシ月池？　アゝお春さんか、是から三人で行くからネ』『どなた？　解りませんネ』『私だよ、聲で知れそうなもんじやないか』『ア、○○さんでせう！　お連はどなた？』『いつもの連中サ』『じや××さんに△△さんネ、皆さんシマつて置きますがよござんすか』『アゝいゝとも、すぐ行くよ、サヨナラ』そして「いつもの連中」は威勢よく『サア行かう』とすぐ前の京濱電車に乘つて東京へ歸つて來て了つた。恐らく、シマはれた三人のオイランと、月池のお春さんとはその晩頸を長くして待ちクタビレた事でがなあらう。(一月二十日)

■其後鴻の巢へ遊びに行つたら、會の二三日あとに高等視察何の某とか云ふ名刺を持つた男が來て、其時の話の模樣などを尋ねた上に、主人の身の上まで詳細に調べて行つた、と云ふ話だ。

■料理屋だもの、淫賣も行かうし、泥棒も行かうし、社會主義者も無政府主義者も行かうぢやないか。それを一々主人まで同類にして了つてゐた日にや、警察も中々御苦勞樣なこつた。

■どうもにせ者らしいから、そんな時には器物や何にかによく注意してゐなくちやいけない、と云つて僕は歸つた。(榮)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

消息

■來る三月廿八、廿九、卅日の三日間、帝國劇場に於て、近代劇協會第二回興行開催の其の出し物は文藝院選定脚本、森鷗外譯ゲョーテ作、ファウスト十四場。例によつて伊庭孝に舞臺監督をかれて登場する。

■堺利彦は此の一月の『新佛教』からキリアム・モリスの『自由鄕』を連載してゐる。廿一世紀の自由平安なる美的社會の夢物語として知られた、News From Nowhere. の全譯だ。

■一時盛んに自由戀愛論と獨身論とを振舞はしてゐた山口孤劍は、近々大阪で結婚するよし。

■淸風堂主人の近作、探偵小說『金髮美人』出る。ステキに面白いものださうだ。主人實の名は安成貞雄。

■安成二郞、四谷區坂町九〇に移る。何んだか知らんが、『僕を生んだと自稱する女と僕の女と何んの關係がある』と云つて憤慨した結果だそうだ。

■一月末に大杉榮は秋田に旅行した。無期徒刑囚の坂本淸馬に會ふべく。

取次書籍

本社に於て次の書籍の取次販賣をいたします。

御注文は成るべく振替貯金を利用せられたく本社の振替貯金は

東京一七一六三番

に加入してあります。郵劵代用は一切御斷りします。

價は定價通りに戴いて、郵稅だけ當方で負擔いたします。

▲社會主義倫理學（カウツキー著　堺利彥譯　金壹圓）

▲死の勝利（ダンヌンツイオ著　生田長江譯　金壹圓四十錢）

▲闇の力（トルストイ著　林久男譯　金七拾錢）

▲近代思想の解剖（樋口秀雄著　金壹圓五拾錢）

▲決鬪（クウプリン著　昇曙夢譯　金壹圓）

▲現代戰爭論（エンゼル著　安部磯雄譯　金八拾五錢）

▲農工業の調和（クロポトキン著　佐藤寬次譯　金壹圓三拾錢）

■定價一册金拾錢、半年分前金五拾五錢。一年分前金壹圓。但し海外よりの御注文は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。

■每年數回擴大號を發行す、其場合には其定價に應じて前金より差引す。

■郵劵代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。

■廣告料特別一頁拾五圓普通拾圓。

■本社振替貯金番號一七一六三

大正二年一月三十日印刷納本
大正二年二月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

淺草區黑船町二十八番地
印刷所　東京並木活版所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第三回

新學期開講

●切實なる時代の要求に依りて生れたる最も實際的なる漢學講義錄！！

（此際入會者には特典あり）

普通漢學講義

講義　毎月二回發行

講師　博士、學士、其他數名

會費　一ケ月　四十錢　一ケ年（全部四圓四十錢）

會期　一ケ年

漢學は東洋思想の源泉にして東亞文明の根本たり其教訓の深遠なる其興味の無限なる一朝にして之を悟るべからず然るのみならず漢文學は日本文學の一支源にして其感化の及ぶ所至大至深なり苟くも漢學の智識を缺きては遂に文を鳴する能はず。思想に志あるものと文章に志あるものとは凡て必ず之を學ばざるべからず（附かも世に漢文學を平易に講述せるもの甚少也、本會夙に『漢學講義』を發刊して其平易なる講義と懇切なる指導により、大に斯界の歡迎を博し既に學期を重ねて基礎益々固く信用益々深きを加ふるに至れり、今や第三新學期を開講し大に特典を設けて會員を募集す。江湖斯學に志あるの士、速に來て入會せられよ。講義錄「見本付會則」申込次第無代進呈す

●漢學獨習に缺く可らざる講義錄として好評嘖々たり

東京小石川大塚上町十三　振替（東）一二九四番

漢學普及會

洋書バアゲーン

	原價	特價
▲英文學史（ガアネツト、ゴツス共著）	四七八圓	二十八圓
▲十九世紀文學主潮（ブランデス著六卷）	十五圓	十三圓
▲トルストイ傳（ポール・ビ・リユーコフ著）	四圓五十錢	一圓五十錢
▲露國革命運動（ジヤアカス著）	二圓五十錢	一圓七十五錢
▲フローベル全集（十卷）	五十圓	二十圓
▲ゴーチヤア全集（二十四卷）	百二十圓	五十圓
▲モウパツサン全集（十七卷）	七十五圓	三十圓
▲ド・ミユツセー全集（五卷）	三十六圓	十圓
▲オスカア、ワイルド全集（十五卷）	六十圓	三十圓
▲バルザツク傳（ロウトン著）	十二圓	六圓
▲革命黨のタイプ（イダ・テイラア著）	二圓五十錢	一圓五十錢
▲犯罪社會學（エンリコ・フエリ著）	八圓	四圓

▲其他文學、美術、演劇、社會學等の著書數種

右何れも英文特製美本、此際上記の如き特價を以て海外より取寄方御依頼に應ず。詳細は彰文閣に御照會あれ

本郷區森川町一番地橋下三六

彰文閣 阿部彰

賣文社

▲營業種目▲新聞雜誌書籍の原稿製作▲英佛獨語の翻譯▲和文の英佛獨譯▲演說講義談話の筆記▲趣意書意見書廣告文書簡文其他一切文章の立案代作及添削▲近地御一報次第參上

四谷區須賀町二二
堺利彥

今回産室を設け便宜を計り實費を以て親切に取扱(閑靜な室あり)

姙婦親切に預

東京市本郷區元町一丁目廿六
水道給水場西通電下四三二九

産婆 前田

實用新案特許

ピラミツト
(たきつけ)

ピラミツトはマッチ一本にて直ちに燃えつき、如何なる堅き薪炭又は石炭にても、たつた一個にてたきつけ得る事請合也。

又ピラミツトは在來品と違ひ、無烟無臭にして清淨なる故、上等の御座敷又は臺所にて御使用なさるとも決して汚れる憂なし。市内の御注文は御一報次第多少に係はらず直ちに持參す

定價百個入 金拾錢

府下代々木字山谷一一〇八

市内一手販賣 **林商店**

▲理想の良縁を望む方は郵劵封入御照會あれば規則書贈呈す

▲弊社は時代の要求に應じ非營利的親切を旨とし迅速秘密に御世話す

結婚媒介

東京市牛込區西五軒町廿二番地

相生社 松波彥吉

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

賣文社長 堺利彦先生新著

賣文集

卷頭の飾 著者の友人先輩 三宅雪嶺、福田德三、花井卓藏、伊藤痴遊、德富蘆花、島村抱月、杉村楚人冠、田岡嶺雲、木下尚江、加藤咄堂、伊井蓉峯、安部磯雄、等六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語

序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 唯物的歷史觀 二、予に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を許す 三、墓場見物 四、中島[illegible] 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第二編 一、春の古服 二、予の喜劇「谷川夢の水」(バーナード、ショウ原作) 三、[illegible] 第三編 一、告白 二、荒畑寒村 [illegible] クレンクビユ、大杉榮 三、謀叛人耶蘇、[illegible]

四六判箱入 定價金壹圓 郵税八錢

賣文社長 堺利彦先生新著

樂天囚人

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉妬、無恥、悖逆を以て世に目せらる、社會主義者が人の子として夫として父として將た人類の一員として宇宙の一分子として、如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て赤裸々に露骨に發揮せるものゝ之を一言にすれば社會主義者の安心を語れるもの……毫も危險の恐れなき快著なり

四六判箱入 定價六十錢 郵税八錢

賣文社長 堺利彦先生譯

ルソー自傳 赤裸の人

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる 波瀾重疊神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは[illegible]識能文の堺利彦先生なり 一讀してルソーの前に立てるの感をなさしむ

四六判箱入 定價金九拾錢 郵税八錢

幸德秋水君最後の文章

基督抹殺論

一代の論客として知られたる幸德秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其獄窓に呻吟するの間特に此一卷を著す所論痛絶快絶行文悲絶愴絶殊に其史的人物としての基督の存在を否認し十字架が生殖器の表號の變形たるを斷ぜるところ奇を驚し肉を刺りて世界の大宗教を抹殺し了せむとす 殆んど完膚なからしむ洵にこれ宗教史上の大發見なり嗚呼幸德秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰く「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の愉讀を冀ふ。

菊判箱入 定價七拾錢 郵税八錢

發行所 東京小石川原町六 振替東京一三五三 鷄聲堂書店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

清風草堂主人著

神出鬼沒

金髮美人

四六版美本

定價五十五錢

郵税四錢

探險小說に文學的價値を附與し、大人の讀物たらしめたるものは英國にあつてはコナン●ドイル、チエスタートン、佛國にあつてはモーリス●ルブランを推す。ルブランの主人公アルセーン●リユーパンは泥棒なり。六歳母の貧苦を救はんが爲に『皇后の頸飾』を盜みてより、欲して盜まざるなく、覘つて奪はざるなく、遂に國を盜むの大盜となり獨帝を翻弄して佛國の爲めにアルサン●ローレン二州を恢復せんとするに至る。天資俊敏にして温雅、博學にして多才、繪畫を能くし、音樂をよくし、建築學に通じ、歷史文學に深く、兼ねて博言學者なり。力二十人に敵して頗る付の美男子なり。俠勇にして女にやさしく、菜食主義者なり。主義として決して殺さず。其神出鬼沒の技、佛蘭西の名探偵蟹丸警視を閉口せしめ、終にホームズを英國より傭ひ來らしむ。

金髮美人は直に是れ探偵術の國際的競技。ホームズの技倆を知れるものはリユーパンとの鬪を見ざるべからず。

神田西小川町二丁目一番地　明治出版社　振替口座東京三九三番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

カウツキー先生原著　堺利彦先生譯

社會主義倫理學

上製箱入
定價壹圓
郵税八錢

哲學界には迷妄にして保守的なる唯心論が跋扈し、文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し、宗教界及び教育界には淺薄にして僞善なる因習道德が唱導せらるゝ今日、此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て、彼の蒙を啓き此の味を照すは、譯者が深く痛快とする所なり、著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人、日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし（譯者）

堺利彦先生著
樂天四人
定價六十錢
郵税八錢

堺利彦先生譯
賣文集
定價一圓
郵税八錢

堺利彦先生著
ルソー自傳　赤裸の人
定價九十錢
郵税八錢

久津見蕨村先生著
眞人僞人
定價一圓
郵税八錢

東京小石川原町六　振替東京一五六八六
丙午出版社

東京小石川原町六　振替東京一三五三
鷄聲堂

近代思想　第一卷第五號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年二月一日印刷納本（大正二年二月一日發行）
二月號　金十錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN